

【完結】 敗北者ユウリの  
ワイルドエリア生活  
(6泊7日)

きなかぼ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「——エースバーン、戦闘不能！ 勝者、ホップ選手！」

ユウリはセミファイナルトーナメントに出場し、決勝戦でホップに敗北した。その3ヶ月後、いつも通りの生活に戻ったユウリの元に、シュートシティで行われるトーナメントの招待状が届く。やる気がなかったユウリはほとぼりが冷めるまでワールドエリアで暮らすことにした。

# 目次

	0日目	1
	1日目～2日目（お客様：マリイ）	
13		
	3日目（お客様：マクワ）	28
	4日目（お客様：カブ）	44
	5日目（お客様：ソニアとルリナと）	
61		
	6日目（お客様：ビート）	83
	幕間（ダンデとキバナ）	104
	7日目（1）（お客様：ダンデ）	114
	7日目（2）～30日後～X日目	
131		



## 0 日 目

「——エースバーン、戦闘不能！ 勝者、ホップ選手!!」

最後のポケモンが倒れた。

審判が勝者の名を力強く叫ぶと、スタジアム全体からびりびりと地鳴りのような歓声が上った。

『今季のジムチャレンジ・セミファイナルトーナメントを制したのは！ 無敵のチャンピオン・ダンデの弟！ ホップ選手だアアア!!』

実況が興奮しながら、今季ジムチャレンジの頂点に立ったホップの名を呼ぶ。

無敵のチャンピオン、ダンデの弟。

あまりに重いその名を背負い続けて、時には苦悩し、心が折れかかった時もあった。

しかしそれでも立ち上がり、ホップはついにダンデと同じフィールドに駒を進めた。

「ホップ、おめでとう!」

ユウリはエースバーンをボールに戻すと、笑顔でホップにそう告げた。

全力で闘った。

不思議と悔しくはなかった。どちらかというと、清々しい。

セミファイナルトーナメント準優勝。

ユウリのジムチャレンジは、ここで終わった。



まどろみの中で目が覚める。

今、何時だろう。

ユウリがぼやけた目でカーテンの方を見ると、暖かそうな光が漏れてきていた。今日のハロンタウンは快晴らしい。そのまま起き上がる気力がなく眠たげにごろごろしていると、勢いよく部屋の扉が開く。

「ちよつとユウリ、もうお昼前よ！ いい加減起きなさい！」

「んー、もうちよつと……」

ユウリはわざとらしくベッドで寝返りをうった。お母さんの怒る声がキンキンとユウリの耳に響く。目覚まし時計のごとく大変うるさい。

「毎日毎日そんなダラダラして……まったく、旅に出たときの元気はどこに行ったのか

しらね」

「ジムチャレンジ終わって疲れてるんだって。じゆうでんちゆうってやつ」

「もう何ヶ月充電中なワケ？」

「はいはい、わかったってば。おきるよ……起きるつたら……」

流星にお腹もすいてきたしそろそろ起きよう。これ以上お母さんを怒らせても厄介だ。

ハロンタウンのホップが現チャンピオン・ダンデを破り新チャンピオンに就任してから3ヶ月が経った。

セミアイナルトーナメントが終わったあとのファイナルトーナメント、そしてホップとダンデのタイトルマッチが行われる間には、ブラックナイトというガラル地方崩壊の危機があったり、ホップとユウリは伝説のポケモンと一緒にムゲンダイナと呼ばれる恐るべきポケモンを打倒して世界を救ったりしたのだがそれは省く。

そんなこともユウリにとっては既に過去の彼方だ。

ああ、そういえばそんなことあったねー。くらのの具合である。

ホップはシュートシティで毎日チャンピオンとしての仕事をしているらしい。テレビのCMとか、雑誌の特集でもホップの姿をちらほら見るようになった。兄弟揃って家にもあまり帰ってこなくなってしまうたとホップのお母さんは少し寂しそうにしてい

たっけ。

ユウリはふと思う。そういえば最近全然ホップと話してないな。スマホでメッセー  
ジはたまに来るけど。

どちらかというユウリは最近マリイとやり取りする方が多い。マリイも兄のネズ  
からスパイクタウンのジムリーダーを受け継いで、毎日ジムリーダーとして鍛錬する  
日々である。その中でストレスも溜まっているのか、マリイはユウリをカフェや買い物  
に誘って雑談という名の愚痴を言うことが増えていた。

やれ、バトルのことになるとアニキは厳しすぎるだの。エール団が暴走気味で抑える  
のが大変だのといつもユウリはスイーツを食べながらマリイの愚痴を聞くのだった。

そんなことを考えながら顔を洗い、歯磨きとうがいをしてリビングに入ると、既に机  
の上には朝ご飯が一式用意されていた。

「いただきまーす」

「もう昼だけどねー」

食べ始めると、お母さんが台所で洗い物をしながらチクリと言う。確かに、朝ご飯と  
いうよりもはや昼ご飯だ。

ユウリは何気なくテレビをつける。すると見知った顔が写っていた。

『では今シーズンも1位でメジャージムリーダーリーグを終えた、ナツクルシテイジム



リーダー・キバナ氏にお話を伺いたいと思います』

『おう、よろしく』

ナツクルシティジムリーダー・キバナ。

ユウリもジムチャレンジの時に闘ったことがある。その後起きたブラックナイトの時にもお世話になったガラル地方最強のジムリーダーだ。若い女性からの人気も絶大で、テレビのCMやファッション雑誌でもジムリーダーの中では多く起用されている。

ジムリーダーってよりはマルチタレントみたいだな。と旅を終えて普段の生活に戻ったユウリは思っている。

『キバナさんは常々、前チャンピオン・ダンデ氏をライバルと公言していましたが……チャンピオンが交代した現在、心境の変化はありますか？』

『勿論チャンピオンに勝つつもりでいつも闘ってはいますがね、オレ様のライバルが前チャンピオン・ダンデであることには変わりありませんよ』

キバナは特に言葉に詰まることもなく、当たり前のようにそう言った。そう聞かれることを予想していたかのような口ぶりであった。

ダンデはチャンピオンの座を退いたが、それでも依然ガラルの伝説的なカリスマであることは変わらない。その人気も絶対的だ。その証拠に現在ダンデが運営するシュートシティ・バトルタワーにはダンデと戦いたい挑戦者が殺到している。

曰く、チャンピオンだった時とは雰囲気も戦い方も変わった。

曰く、負けて挑戦者の立場になったことよってさらに強くなった。

『つい先日開催が発表されたガラル・チャンピオンシップトーナメント——ダンデ氏も招待選手として参加するとの情報がありますが、キバナさん、意気込みをお願いします』

『決まってるだろ？ オレ様が必ず勝つ。もちろんダンデもホップも倒して、優勝しますよ』

キバナはそう答えると、一瞬バトル中に見せるような獰猛な笑みを浮かべた。ビッグマウスにも見えるそれはファンサービスも欠かさない、視聴者向けのキバナの演出である。

(キバナさん、相変わらずだな)

ユウリは苦笑した。

キバナはダンデに一度も勝ったことがない。にもかかわらずダンデのライバルを自称している。それは心ない人に馬鹿にされることもあるけれど、実際には誰にも真似できないすごいことだ。普通のトレーナーならとつくに心が折れていることだろう。

あらゆる策を動員してそれでも勝てない相手に焦がれ続けるその気持ちはもはや狂気だ。

狂気。

キバナのそれと同じようなものをユウリは向けられたことがある。

あれはわたしに対してなのか、それとも彼の兄に向けてか。

『さて、それでは最後に現チャンピオン、ホップ選手のお話を伺いましょう。宜しくお願  
いします』

『よろしくどうぞ！』

ユウリはチャンネルを変えようとした手を止めた。

「なにになに？ ホップ君出てくるの？」

お母さんもホップの声が聞こえたのか、洗い物を中断してユウリの横に座ってテレビ  
を見始めた。

画面にはインタビュアーと一緒に深紅のチャンピオンマントとユニフォームを身に  
纏ったホップの姿が映し出された。チャンピオンになった直後は取材であたふたした  
りと初々しかったが、今は多少慣れてきたようでキリツとした表情をしている。マント  
もすこし様になってきたかな？

ホップ、がんばってるなあ。と素直にユウリは思う。

それにひきかえ自分は家でぐだぐだと惰眠を食う日々だ。

『今回のチャンピオンシップトーナメント、現メジャーリーグ・ジムリーダーだけでな

く、前チャンピオンや過去のジムチャレンジで優秀な成績を収めたトレーナーなども多数招待選手で参加するということですが……その中でホップ選手が最も気になる存在を教えてください』

ふうん、ホップが今一番気になるトレーナーか。最近ポケモンリーグは全然見てないけど、ちよつとだけ気になるかも。ユウリはマイクを向けられたホップが何を言うか注目した。

『もちろんユウリだぞ』

「はあ？」

ユウリは思わずすつとんきような声をあげた。何でここでわたしの名前？ てか試合に出ない人の名前を言つてどうする。そもそもチャンピオンシップトーナメントつて何。わたし今初めて聞いたぞ。

——過去のジムチャレンジで優秀な成績を収めたトレーナーなども多数招待選手で参加する。

ユウリはもしかして、と思う。

たしかにわたしは今季のセミファイナルトーナメントで準優勝している。優秀な成

績と言ってもいいだろう。

わからないなりにユウリは考えた。自分の知らないところでコレにわたしが出るこ  
とになってるってわけ？

セミファイナルトーナメントにおけるホップとユウリの対決は今季ジムチャレンジ・  
ファイナルトーナメントを通してベストバウトの1つに数えられた。

もちろん注目度・視聴率ともにホップとダンデが闘った兄弟タイトルマッチの方がは  
るか上だったが、実力あるエリートトレーナーや、一部のジムリーダーの間ではこうも  
囁かれた。

セミファイナルトーナメントの決勝こそが、今季最高の闘いだったと。

もちろんそんなことはユウリは知らなかったし、セミファイナルトーナメントで敗北  
した自分がそこまで注目されているとは夢にも思っていなかった。

『ユウリ、トーナメントの決勝で待つてるぞ！』

びしつと画面に指をさしてホップが言い放った。そのいつものホップらしいキラキ  
ラした目は、ユウリがこの放送を見ていないわけがないという確信に満ちている。公共  
の電波を私物化するな。

そしてユウリはチャンネルを変えて溜め息をついた。てかそんなの初耳だったの。お母さんは「ホップくんらしいわね」と笑っている。なんでそんな落ち着いてるの。

「そもそも招待なんか来てないんだけど……」

「何言ってるの、おとといポケモンリーグから書類が届いたって言ったじゃない。あれのことでしょ？ あんたの机の上に置いてあるわよ。もしかして見てないの？」

「ええ？」

ユウリは頭をひねって記憶を辿る。

そういえばそんなこと言ってたかも、ゴロゴロしてたからよく聞いてなかった。確認しにこういうと自分の部屋に戻ろうとしたその瞬間だった。

ピコン、ピコン、ピコ、ピコ、ピ、ピ、ピ、ピ……。

ユウリのスマホロトムがものすごい勢いで通知音を鳴らし始めた。

画面を見るとものすごい勢いで色んな人からメッセージが来ている。

ホップ、マリイちゃん、ジムリーダーの人たち、あ、ビートからもきてる。ダンデさんもソニアさんも。ジムチャレンジの他の同期、旅の中で仲良くなったポケモントレーナー、ブティックの店員さん、連絡先交換したフアンの子……。ボールガイは……

どうでもいいや。

以前ジムチャレンジ中にきまぐれに作った、大して更新してないSNSアカウントにもリプライやメッセージが沢山来ていた。もう色んなアプリの通知が混ざりまくってわけがわからない。

多分今の放送を見た人たちが一齐にユウリにメッセージを送っているのだろう。

「うっさいなあ……」

ユウリは通知を垂れ流すスマホロトムを鬱陶しそうな顔で部屋に持っていくと、それをベッドの上にごん投げた。ぼふんと音がしてスマホロトムが布団に沈む。

「ロトム！ 電源消しといって！ 寝てていいから」

『わかったロト……』

ロトムも通知を受けすぎて疲れたようだ。フツと画面がブラックアウトし、通知音もぴたりと止んだ。

そうしてふう、とユウリは一息ついた。そして落ち着くと同時にふつつつと苛立ちが湧いてくる。

ああ、もう、みんな勝手ばかり。わたしがそんなにバトルをしたいとでも？ そもそもわたしはあれから3ヶ月間バトルもなにもやってないんだぞ。ホップだってあんな「来るのが当然」みたいな言い方。少しくらい人のことを考えてほしい。わたしは充電

中なんだ。

あああ！ イライラする！

いてもたってもいられず、ユウリは部屋を飛び出した。

「お母さん、ちよつとワイルドエリア出かけてくる！ 何日か泊まるけど、スマホ持ってかないからよろしく！」

「はあ!? あんたトーナメントの招待はどうするのよ」

「考え中！」

ユウリは着替えてキャンプの支度をする、机の上に置いてある1つのモンスターボールを持った。その隣にはポケモンリーグのシンボルマークをあしらった、上品なレイアウトをした大きめの封筒。

ああ、これか。でもユウリはそれを一瞥するだけで開けることもしない。

ユウリはリュックを背負って家の外に出る。背中にかかる重みが旅をしていたころの自分をわずかに思い出させた。自分から用事を作ってハロンタウンの外に出るのは久しぶりだ。

行き先はワイルドエリア。

はあ、とにかく静かな場所に行きたい。



## 1日目〜2日目（お客様：マリイ）

## 〔1日目〕

ブラッシータウンから電車に乗り、ワイルドエリアに入ったユウリは数日泊まれる分の食料を買い込んで、とりあえず人目につきそうにない場所を探した。

ワイルドエリアは広大だが、生息する野生のポケモンのレベルによつて立ち入りやすい場所とそうでない場所がある。そしてユウリが選んだのはとびっきりの立ち入りにくい場所。

ここならよつほどの物好きなエリートトレーナーでもない限り人と会うことはない。

げきりんの湖。そのほとり。

キラキラと太陽の光を反射して輝く静かな湖。

それを眺められる小高い丘の上で、ユウリはキャンプの準備を始めた。

暖かい日差しを浴びて、時折聞こえる鳥ポケモンや虫ポケモンの鳴き声をBGM代わりにしながら、ユウリはキャンプの準備をする。テントを建て、カレー鍋用の火おこしセツトを用意する。折りたたみ式の食卓も立てる。

「エースバーン、ありがとね」

一通りキャンプの用意が整うと、ユウリは一緒に作業を手伝ってくれた相棒の頬を撫でた。エースバーンも嬉しそうに笑う。こういう素直なところはヒバニーだった頃と変わらない。

ユウリは旅を終えたあと、最初の相棒であるエースバーン以外のポケモンを全て預けた。旅の中ならともかく、6匹ものポケモンを世話するキャパシティはハロンタウンの自宅にはなかったし、そもそもバトルをする気が起きなかったのでたくさんの手持ちは必要なかったのもある。

少し疲れたユウリは立ち上げたハンモックに身体をのせ、ごろりと寝転がった。ゆらゆらと揺れている感覚が心地よい。空気はおいしい。人の声も聞こえない。

ここにいればお母さんにたたき起こされることもないし、スマホの通知が鳴ることもない。

ああ、静かでもいい気分だ。



## 【2日目】

次の日。天気は曇り。

好きなだけ寝まくって、ユウリはちようどお母さんに怒られる時間であろう昼前に目覚めた。

身体がこの時間まで寝ていたなら怒られることを覚えているのか、家にいなくてもなんだかんだで同じ時間に起きてしまうことにユウリは苦笑した。

テントの外に出るとエースバーンは既に起きていて、湖の浅瀬の近くで手頃な小石を使ったリフティングをして遊んでいた。

「エースバーン！ おはよー！ ご飯つくろっつか！」

お腹がすいた。お昼のカレーを作ろう。

「ユウリ、ここにいたと？」

ユウリがエースバーンと一緒にお昼のカレーの準備をしていたとき、背後から人の声  
が聞こえた。

それは聞き慣れた友達の声だ。驚きはない。多分ここに最初にやってくるのは、彼女  
だと思っていた。

それにしても人に会わないようにここにきたのに、キャンプ2日目にして見つけられ  
るとはちよつと残念である。せつかくの1人の時間が。ユウリは内心がっかりした。

「マリイちゃん、やほー」

「やほーじゃない。メッセージも返さんで、何かあったんかと心配したんだけど」

ユウリは明るく挨拶したが、マリイの表情は硬い。いや、あまり笑うこともない子だ  
けど、それでもいつもより機嫌は良くなさそうだった。

「ゴメンゴメン。通知の量ヤバくてめんどくさくなつちやつてさ……。ホップも勘弁し  
て欲しいよね。チャンピオンだからって公共の電波であんなことしちゃダメだよ。  
てか、よくここがわかつたね。スマホホトムも持ってきてないのに」

「おばさんから聞いた。ワイルドエリアに行つたって。多分普通の場所にはおらんと  
思つたから、危険なエリアをあえて探してた」

「マリイちゃん、わたしの思考回路を読むとは……できる」

「ユウリはバトル以外のことじゃ単純だし、そんな大した話じゃなか」

マリイはにべもなく言った。

がーん。とユウリは普通にショックを受けた。

「エースバーン、わたしってそんな単純に見える?」

ユウリは相棒に助けを求めた。エースバーンはなんだかとても困ったような顔をしている。ちくしょう! わたしってそんな単純に見える女だったのか……。

「あ、マリイちゃん。今お昼の準備してたんだけど、カレー食べてく?」

話を変えよう。ユウリが提案するとマリイはむすっとした顔で頷いた。ユウリはこの顔をよく知っている。いつも愚痴を言う前のマリイはよくこんな顔をするからだ。そしてその原因は兄のネズではなくわたしだろうと。

はあ、これは面倒くさい話になりそうだ。



「へい！ あまくちアップルカレー！ お待ち！」

「……ありがとう」

ユウリはノリノリでマリイの前にドンッとカレーを置いた。マリイは塩対応だった。はあ、どうせ面倒くさい話が始まるんならご飯くらい明るく食べようと思ったのに。ユウリは内心ため息をつく。ささやかな抵抗も今のマリイの前では無駄であった。

そしてこれからするのは、ポケモンたちに聞かせるには憚られる内容だろうとなんとなくユウリは思っていたので、エースバーンとモルペコには少し離れた場所でカレーを食べさせている。

「ねえ、ユウリ……あんた、どうしてバトルから逃げるの？」

実際その通りで、マリイはしばらく無言でカレーを食べていたが、やがて口を開くといきなりユウリに切り込んだ。

「逃げるなんてひどい言い方だなあマリイちゃん。単にホップに負けて充電中ってだけなのに」

「嘘でしょ」

マリイはユウリのそれっぽい理由を全く信じていない。さらにたたみかけるようにマリイは言葉が続けた。

「最初はホップに負けて、そのショックで落ち込んでバトルから離れたんだと思ってた。」

だからあたしもとやかく言わなかった。そのうちまたバトルする気になるだろうって。でもユウリと過ごしてうちに、そうじゃない気がした」

ユウリは何も言わずに続きを促した。

「ユウリ、ホントはあんた、ホップに負けたからって別に落ち込んでないよね？　なんでバトルせんのか？　今だってそう。トーナメントの招待ほっぽりだして、スマホも持たずにこんなところにいる。逃げてるって思われても仕方なか。あたしはユウリと闘って勝ちたいっていつも思ってるのに、あんたはいつも笑ってはぐらかす」

「うーん……」

なんと言え方がいいのか、ユウリは迷っていた。

マリイの推察は事実だった。ユウリは別にホップに負けたから落ち込んでるわけでもないし、それが原因でバトルをやりたくなくなつたわけでもない。

もちろん本当の理由はあるといえはある。ただ、その理由を言つたところで今のマリイが納得するかどうかユウリにはわからなかった。

「ねえユウリ。ジムチャレンジの中であたしもホップもビートも他のみんなも、あんたに勝つために鍛えてきたんだよ。同期の中で誰が最強かなんて、誰に聞いたってそんなのわかりきってる。みんなユウリが最強だって言うよ」

ジムチャレンジ中は同期同士で本気の腕試しすることも多くさんあった。その勝負

にことごとくユウリは勝利し、いつしかユウリの強さは同期みんなの目標になっていた。ユウリに勝てればジムチャレンジの頂点に立てる。あの頃はそんな燃えるようなモチベーションによる共通認識が生まれていた。

そして、ユウリはホップにセミファイナルトーナメントで敗北した。今、チャンピオンはホップだ。

無敵のチャンピオン・ダンデを倒したホップが一番強いに決まっている。にも関わらず、マリイはユウリが最強だというのだ。

「練習試合じゃマリイちゃんだつてわたしに勝つてるじゃん」  
「そういうことじゃなかー！」

マリイは机を両手でバンと叩いた。食器が揺れてガチャンと音を立てる。うおお、とユウリがびっくりしてぶるりと背筋をたたせた。

「ごめん……」  
熱くなりすぎた。マリイはハツとして思わず謝った。

練習試合。ポケモンのワザや特性を確かめたり、作戦を組み立てるために行う実験みたいなもの。たしかにそういう時はユウリも普通に負けていた。だがマリイが言いたいことはそういうことではない。

「……練習試合で勝っても、本気でやる時はいつつもユウリの勝ち。ビートだって、重要



な局面ではあんたに勝てたことなんて一度もないよ」

「でもホップはわたしに勝ったよね」

「あれは時の運でしょ。たまたま攻撃が急所に当たったりして、ほんのすこしホップに運が向いてただけ。あんたが実力的にホップの下になったわけじゃない。次やったらユウリが勝つても何もおかしくない」

たまたま攻撃が急所に当たった。

たまたま命中率の低いワザが当たった。

たまたまワザの追加効果が発動した。

たしかにそれは運の良さ、という一言で片付けることもできる。でもユウリはそうは思わなかった。

「マリイちゃん、それホントにたまたまだと思う?」

「……どうということ」

「運つていうのは掴み取るものだよ。それにたまたま降ってきたからつてそれだけで勝てるものじゃない。一見偶然に見えても、それはありとあらゆるワザと戦術の応酬の積み重ねの上に生まれる必然に過ぎないの。マリイちゃんだって本当はわかってるんじゃない?」

マリイは歯噛みした。高レベルのポケモンバトルではそんな運の1つや2つだけで

勝敗が決することは無い。それはジムリーダーであるマリイもよくわかっている。ただ、自分が認めたくないだけだ。

自分の目標になるトレーナーには常に最強であって欲しい、そんな気持ちはただのワガママだろう。

「わたしをホップが実力で上回った。わたしが負けた理由はシンプルにそれだけだよ。だからマリイちゃんもホップを目標にしなよ。バトルをやめたわたしなんかじゃなくてさ」

「そんなの卑怯！ 一回負けたくらいで何さ！ それだけで逃げ出すなんて、あたしは絶対に認めない！」

マリイは大声で叫んだ。ワールドエリアに声が響く。でも、周りに人はおらず、帰ってくるのは気ままに暮らすポケモンの鳴き声だけだ。

「……マリイちゃんはわたしに勝ちたいの？ 最強のトレーナーになりたいの？」  
「それは、どっちもよ。でもあたしの目標はユウリ、あんたしかおらんけん」

マリイは鋭い視線でユウリの顔を見る。ユウリはマリイの瞳の奥に狂気にも似た執念を感じた。それは3ヶ月前のセミファイナルトーナメントで見せた、バトル中のホップの表情にとても似ていた。

ああ、ホップだけじゃなくて、マリイちゃんもそうなのか……。

マリイの思いを理解したユウリは絶望的な気分になった。

『——勿論チャンピオンに勝つつもりでいつも闘つてはいますがね、オレ様のライバルが前チャンピオン・ダンデであることには変わりありませんよ』

ユウリはキバナの言葉を思い出す。

舞台から降りてもどこまでも追いかけてくるのであれば、正直に話すしかない。

「……マリイちゃん。わたしの夢って何だと思う?」

「ユウリの、夢?」

マリイは記憶を辿った。ダメだ、記憶にない。忘れたのか。いや、そもそもユウリがそんな話をした覚えがない。

「あはは、変なこと言つてごめん。知らないよね。だってわたしに夢なんてないから。話してないもん」

「馬鹿にしてんの?」

「ちがう、ちがう……最後まで聞いて。なんでバトルしないか、つて話。要はそういうことなの。バトルする理由がないから、バトルしないだけ。やりたいこともない。なりたいたいものもない。ただのバトルが強いだけしかとりえのない女がわたし」

「そんな」と……

ないでしょ。と言おうとした。でもマリイには心当たりがあつた。ジムチャレンジ

で優秀な成績を収めたトレーナーはすでにみんな自分の夢や目標に向かつて、次のステップを踏み出している。ホップはチャンピオンに、マリイとビートはジムリーダーに。

でもユウリだけが何もしていない。

世代最強であったはずの女だけが何もせず、バトルもやめ、まるでジムチャレンジなどなかったかのように生活している。

マリイが兄から次期ジムリーダーを受け継いだように、ユウリに対してもさまざまに新たな仕事に関するオファーがあつた。当然だ。セミファイナルトーナメントで優勝したトレーナーを世間が放つておくわけない。ブラックナイトの件もある。伝説のポケモンに認められた、ガラルの英雄の片割れという名声。それにホップがチャンピオンになつたことで、自然とユウリの評価も高まつていったのは事実である。だがユウリはその魅力的であるはずの全ての誘いを断りハロンタウンの実家に引っ込んでしまった。

マリイには信じられなかった。何も目標がない人間がそれほど強くなれるものなのか。

ただ、たしかにマリイが自分の目標を話した時、ユウリの目標とか、夢とか、そういうものを聞いたことがなかった。そんな背負うものを語らずともただひたすらにユウ

りは強かった。

(そしてそんなユウリの姿にあたしは憧れすら抱いた)

「じゃあ……ユウリはなんでジムチャレンジなんか始めたの」

不思議だった。夢も目標もないやつが、どうしてジムチャレンジなんか始めてチャンピオンを目指すことになる？

「わたし、映画が好きなんだよね」

唐突にユウリはそんなことを言う。何の話だ。マリイは訝しげに目を細める。

「まあそんな顔しないで聞いてよ」

昔、男の子が4人で線路を歩いてる映画を見た。題名や展開は忘れてしまったけど、感動した思い出だけは鮮烈にユウリの脳裏に焼き付いている。あれを見て以来ユウリは映画を見るのが好きになった。

「キラキラした幼馴染の男の子が、チャンピオンを目指して、時には喜んで、時には泣いて、それでも立ち上がって、成長して、頂点を掴むお話。そんな映画を……わたしは一番そばで見えていたかったの」

どこか遠い目をしながら、懐かしむような顔でユウリは話した。

それはすごい遠回しな表現だったが、それでもマリイはユウリの言いたいことはなんとなくわかった。なんだかんだでマリイはユウリとの付き合いが深い。

マリイは考える。よくあるアニメのヒロイン。ホップの隣で活躍を見守る女の子。そんな風にユウリはなりたかったのだろう。でもそうはならなかった。いつしかユウリはあたしたちにとって倒すべき目標になっていったから。

「まあ、結局のところ自分のことを観客だと勘違いしてた悪役だったんだけどね、わたしは」

ユウリは映画の中であらゆるキャラクターを圧倒的な力で問答無用でぶちのめす暴力装置だった。そんなものがいたらラスボスにしかない。

「ユウリあんた、もしかしてホップのことが好きだったと？」

マリイは真面目な顔で、しかしわずかに気色を秘めた瞳でそう言った。マリイも年頃の女子だ。そういった話に興味がないわけではない。だがユウリは恥ずかしくすることもなく、いつも通りの調子で答えた。

「うーん……ホップのことは幼馴染で親友だし、好きだけど、マリイちゃんが言ってるみたいなのさ。そういうんじゃないんだよね……」

恋、ではない。

ただ見守っていたい。そんな感じ。

あのキラキラした瞳が見つめる先を、映画を見るように眺めていたい。

それはダンデのチャンピオンタイムに熱狂する人たちの姿勢によく似ていた。

3ヶ月前に負けたあの日から、ユウリはチャンピオン・ホップが作り出す未来を外から見て楽しむただの1ファンになることを決めていたのだった。

負けたのはちようど、きりがよかった。

だから、迷うこともなくユウリはバトルすることをやめた。

舞台から退場し、客席に戻ったのだ。

### 3日目（お客様：マクワ）

「ユウリ、あたしは絶対にあんたに帰ってきてもらうから。また来る」

結局マリイちゃんはあの後も納得しないまま、そっけなくそう言うどまんぶくもよう  
で満足したモルペコを連れて帰って行った。

こういう時、どうすればいいのだろう。

わたしにはまだ、答えが見つからなかった。

#### 【3日目】

今日は晴れ。でも大きい雲が流れていて、時々曇ったりして安定しない。

ユウリがエースバーンと一緒に、昨日と同じように昼ごはんの準備をしていると、今日も人に声をかけられた。

またか、とため息をつく前にユウリは疑問に思った。その声は聞いたことがあるようなないような、ユウリにとってあまり馴染みのない人物のものだったからだ。



「不思議ですか？ 僕がここに来たことが」  
食事用のテーブル。

それを挟んだ向こう側に座っていたのは、ここに誰か人間が来るにしてもユウリが全く想定していない人物だった。

目立つ金髪に、特徴的な鋭角のサングラスをかけた恰幅のいい青年。

「えっ、いやそんなことは……マクワさん」

ユウリはやや威圧的なその外見にややたじろぎながら答えた。

キルクスタウンジムリーダー・マクワ。

「いわタイプを使う雪降る街のジムリーダー。ユウリにとってはかつてジムチャレンジの6番目の関門だった。」

バトルしたことはあるので、顔見知りではある。

でも、それだけだ。ジムチャレンジで関わった以外、ユウリはマクワと話したことはない。当然ユウリに会いにマクワがここに来る意味もさっぱりわからなかった。

「いえいえ、大丈夫ですよ。あなたがそう思うことこそが僕がメツセンジャーとしてここに来た理由ですからね」

マクワはあくまで紳士然と答える。スタイリッシュなチャラ男みたいな外見をして

いるが、マクワ自身は礼儀正しい男である。ファンサービスも良好で、新進気鋭のジムリーダーながらそのギャップからファンも多い人気者だ。

「メツセンジャー？」

「リーグ運営委員会の伝達係、という意味です。内容はおそらく察しているとは思いますが」

「ああ……」

それだけでユウリは察した。トーナメントの招待をぶつちぎったせいでマクワはわざわざここに来たのだ。ほとんど話したことのないジムリーダーにこんなことをさせてしまつてユウリはすこし申し訳ない気分になる。

「げきりんの湖まで安全に来られるトレーナーは限られます。なので必然的にジムリーダーの誰かが説明に赴く必要があつたわけですが……まあマリイさんがあの調子なので、話が明後日の方向に向かず用件を端的に伝えられるであろう、ユウリさんと関わりが比較的薄い僕が選ばれたというわけです」

なるほど、そういうことか。ユウリはマクワが来た理由に納得した。たしかに今のマリイちゃんとはまともな話にならないだろう。他の比較的交流のあるジムリーダーでも、昨日みたいに話が明後日に飛んでいくかもしれない。

「本来ならこういう役目はネズさんが適任でしょうが……ジムリーダーも引退してます

し、妹のマリイさんがあなたと仲が良いこともありすからね。やりにくいだろうということで」

「ああ……たしかに……」

ユウリは苦笑した。たぶんネズさんはこんなことめんどくさくて絶対やりたくないだろう。

同時に思う。なんでジムリーダーが出てくるほど、わたしへのトーナメントの招待がおおごとになっているんだろう。

普通ジムリーダーが直々に出てくる案件なんてそうはない。ましてや優勝したわけでもないただのジムチャレンジャー経験者に。

「あの、マクワさん。ホントにわたし、トーナメントに出なきゃいけないんですか？ わたしなんか別に出ても出なくても変わらなくないですか？ わざわざジムリーダーが直々に説得するほどの実績は無いと思うんですけど……」

ユウリは素直に疑問をぶつける。マクワはなんと困ったような顔をした。何か言いづらいことなのかもしれない。ほんの少しユウリは嫌な予感がした。

「まあ、一昨日までであればトーナメントをあなたがあぶつちぎった所で、誰も咎める人間はいなかったでしょうね。ですが事情が変わりました。これを見てください。ハイ、口トム」

『オー・ケー！』

マクワがそう言うと、スマホロトムがユウリに向けて画面を映し出した。画面に映っているのは大手のウェブニュースの動画だ。

「……………え？」

ユウリは目を見開いた。動画のニュースの中では、アナウンサーがユニホームを着たわたしの写真をヴィジョンに映し出して何故かわたしのジムチャレンジの経歴を紹介している。再生数を見た。50万再生!?

「あなたは知らないかもしれませんが……………今、ガラル中であなたのことが話題になっています。ニュース、バラエティー番組、SNS……………兄のダンドの名を差し置いてチャンネルがあなたの名前を出したことで、ユウリという名前がガラル中を駆け巡っている。あなたとチャンネルが闘ったセミアイナルトーナメントの再放送もやってましたね。昨日」

「どうなってるの……………」

どうやら世間はユウリが想像するより何倍もおかしなことになっているらしいかった。ユウリは帰ってスマホを再起動するのが恐ろしくなった。通知多すぎてロトムぶっ壊れたらどうしよう。

「こうなるともはや委員会としては、あなたには必ずトーナメントに参加してもらわな

ければならなくなってしまいました。もちろん興業的な面もありますが……第一にはあなたを全国ネットで指名したチャンピオンの面目を潰すことになりかねませんので」

だから公共の電波を私物化するなって。ホップ、あの野郎。お前のことは好きだけど今回は流石に許しがたいぞ。ユウリはあからさまに嫌な顔になった。

「ユウリさん、つまりあなたはチャンピオンにはめられたということです。そこまではチャンピオンはあなたをポケモンバトルの場に引きずり出すことを望んでいる」

ユウリはただただため息をついた。わたしはいつまでワイルドエリアに引きこもつてればいいのだ。人間社会に帰るのが息苦しい。

「……と、ここまでが委員会とチャンピオンの考えです。ですが」

マクワはそう言うのと口角をつり上げた。

「僕はあくまでジムリーダーであつて、委員会の人間ではありませんからね。率直に言うとな僕個人としては、あなたがチャンピオンシップトーナメントに出場しようと辞退しようとなたいして興味がありません」

「ええ？」

つまりどういうことだ。一瞬ぼかんとした表情になるユウリを見て、マクワはサンダラスのフレイムに触れながらフツと笑った。キザな微笑みが絵になる男だ。

「ですから、あなたも特に気負って世論や委員会の思惑に乗る必要はありません。出場

したくないならそれはそれでいいのです。まあ……その顔を見て安心しましたが」

そう言い切るマクワはロツクな男だった。そしてユウリのひどくげんなりした顔を見る。それは決して見た者が安心するような表情ではない。ユウリは意味がわからなかった。

「もしあなたがチャンピオンに負け、落ち込み、ポケモンバトルが恐くなりスランプに陥った可哀想な少女であったなら、もっと別の言葉が必要だったでしょうから。ただあなたの反応を見る限りその心配はないようだ」

あ、たぶんこの人いい人だ。

ユウリは嫌な気分の中、ほんの少しだけそれを晴らす光明を見た気がした。

「……と、いうことで、そろそろ僕が来た本来の目的に移るとしましょう」

「あ、はい」

ユウリが思わず背筋を正して頷くと、マクワは持ってきたシャレオツな鞆から一枚の大きめな封筒を取り出し、中身の書類を抜き出した。すでに封は切られている。ユウリはその封筒と同じものが自分の部屋の机に置いてあったのを思い出した。

「ガラル・チャンピオンシップトーナメント。要項その1、えー、参加者は現メジャーリーグジムリーダーおよび……」

「ちよ、ちよつと待ってくださいマクワさん。そんなことしなくても自分で読みますよ」

ユウリに書類を渡すかと思いきや、なぜか唐突にマクワは自分で書類を読み上げ始めた。ユウリがびっくりしてその声を遮ると、マクワはほんの少し意地の悪そうな顔をした。

「そうでしょうか？　ご実家に送った書類にあなたは手を付けていないと聞きました  
が」

「うっ……それは」

「ハハ、別に聞かなくともかまいません。僕が請け負ったのは『ユウリさんにトーナメントの内容・ルール・出場の可否の返答期限を伝えること』だけです。あなたにそれを聞かせることまでは指示に入っていない。あ、ただ僕の声が聞こえる範囲にはいてくださいね？　そうしないと伝えたことにはなりませんから」

そう言つてマクワは再び淡々と書類を読み上げ始めた。本当にユウリが聞いてなくても構わないかのように、ただただ書類だけを見ている。

マクワさんつてこんな人だったんだ。いい人、かもしれないけど、たぶん気を遣つてくれているわけではない。

マクワはきつと本当にユウリが何をしようとたいして興味がないのだ。ユウリはやや呆然としながらトーナメントに関する説明を右から左に聞き流していた。

「と……説明はこんなもんです。何か質問があればお聞きしますが」

「えーつと……特には」

結局ユウリはそれから他のことをする気にもなれず、マクワの前でただただ説明を聞いていた。ただしその内容はどうでもいいので大して頭に入っていない。

「ハハ、でしようね。それでは僕はこの辺で」

マクワはそんなユウリの反応を見越していたかのように軽く笑い、テーブルを立つた。用が終わったらすぐに帰る。ああ、確かにメッセンジャーとしてはらしい振る舞いだ。

「あ、あのマクワさん！」

「なんでしよう？」

しかしユウリは帰り支度をしようとするマクワを呼び止めた。

「よかつたらカレー！ お昼ご飯！ 食べていきませんか？ せっかくわたしのために時間作って来てくれたから、それくらいさせてください。カレーの味には自信あるんで！」

テーブルから身を乗り出してユウリは力強く言う。その様子を見てマクワは一瞬意外そうな顔をしたが、すぐにニツと挑戦的な笑みを返した。



「……フ、そういうことであれば、遠慮無く頂きましょう。僕の舌を唸らせるほどのものをお願いしますよ?」

「ま、任せてください!」

ユウリは初めてカレーを作る前に緊張した。

なんとなく「ごちそうしたい」という気持ちだけではこの人は引き留められない気がした。だから、味で勝負することにした。

ユウリはなんとも不思議なこのマクワという男と、もう少し話してみたかったのであった。



「……驚きました。これは確かに美味しいですね。リザードン級といってもいい」

「ふふ! よかった、そうでしょう!」

出されたカレーを口に運ぶと、マクワはここに来て初めて驚きの表情を浮かべた。ユウリもカレーを食べながらほっとした顔で言う。気に入って貰えて良かった。ユウリは心の中で胸をなで下ろした。

ユウリが作ったのはからくちあぶりテールカレーだ。肉厚なヤドンの尻尾はジューシーで、辛みのあるカレーとマッチしてとつても美味しい。

「しかし……僕がよく辛いものが好きだと気づきましたね。いつそカレー屋にでもなつてみたらどうです？」

マクワが心底不思議そうにそう言った。マクワとユウリがまともに話したのは今日が初めてなのだ。それだけで自分の好みが変わるものか？

「いやあそこまでは……アハハ。バトルしたら何となくわかります。性格はわからないですけど、その人が何が好きで、何が苦手なんだろうっていうのは、なんとなく」

「……なるほど、そこがあなたの強さの一端、というわけですか」  
マクワは納得したように呟いた。

ユウリは何気なく言うが、それは異様な洞察力といってもいい。

そしてそういつたトレーナーの好みはバトルで使用する戦術、使用するポケモン、持たせる道具、覚えさせるワザにも関わる重要な要素だ。

「しかし……あの3ヶ月前の、セミアイナルトーナメントの決勝戦。あの試合はあな

たらしくなかった。勿論素晴らしい試合ではありましたが」

「えっ?」

マクワが思っても見ない話題に突っ込んできたので、ユウリは思わず聞き返してしまふ。この流れでいきなりあの試合のことを話題にしてくるとは思わない。

マクワはユウリの戸惑った様子にも構わず言葉が続ける。

「普段なら10手先を見据えるあなたが、8手先までしか読み切れていなかった。昨日、その試合の再放送を見て改めて思いましたが……本来であれば、あなたにももつと無数に勝ち筋があったはずだと僕は考えます」

ユウリは直感した。この人は、本質的に、強い。

ハードロック・クラッシュヤー、マクワ。今季のジムチャレンジが行われる前は、キバナの次にチャンピオンに届きうる実力を持つ若手のホープと呼ばれていた男。

ユウリにとってはジムチャレンジで闘う関門として立ちふさがったただだが、本気のマクワはきつともつと強いのだろう。

「なぜ、とは聞きません。ただあなたの調子が悪かったのでしょうか」

「ごくり、とユウリは喉を鳴らす。

マクワの表情を見た。特に今までと何も変わらない。ただ世間話しているかのような、そんな雰囲気。気を遣われているのか。いや、そうじゃない。この人はもともとこ

ういう人なのだ。

「すごいですね……わたしのこと全然知らないのに、そこまで言い切れるの」

「ええ、あなたのバトルは注目して観察していましたから。僕はあなたの人間性には大して興味がありませんが、あなたの生み出す戦術は大いに評価しています。そしてこのカレーもね」

マクワはスプーンで軽く食器を叩いた。チン、と小気味よい金属音が鳴る。

「マクワさんってかっこいいですね。今からマクワさんのファンクラブ入ろうかなあ」

素直にユウリはそう思った。この人がファンから人気がある理由が分かる気がする。尊大な物言いをするのに全く嫌みがないし、重い雰囲気になりそうな話題もするりと話す。これでファンサービスもよければそりゃあモテるだろう。

「……冗談ですよね?」

「いやあ割と本気ですよ」

マクワが怪訝そうな顔を見ると、へへへとユウリは笑う。ユウリはマクワというトレーナーに単純に興味があった。

マクワはユウリの人となりを知らないからこそ、純粹にバトルだけから垣間見えるユウリのポケモントレーナーとしての本質に迫っていた。おそらくユウリと仲が良いトレーナーであれば気づくことが出来なかつただろうことまで。

そしてユウリにとって、そういった視点で自分を見られるということがとても新鮮だった。もしかしてそこが気になったからマクワさんと話したくなったのかも。

ひたすらバトルを観察し、己の糧とする。

言葉で言えば簡単だが、マクワのしているそれはおそらくとてつもなくストイックなことだろうと今のやりとりでユウリは察していた。映像の内容を全て暗記するほど繰り返し見続けるようなものだ。そう思うほどマクワの指摘は抽象的にもかわらず正確すぎた。

もうバトルをするつもりがない、観客という立場からみても、トレーナーとしてのマクワはとても魅力的な存在に思える。

興味が湧いたついでに、ユウリはひとつ質問を試してみることにした。

「あ、そういえば、マクワさんの好きなカレー教えてください！ カレー屋始めるときの参考に使いたいんで！」

それを聞いたマクワが思わずつつこけて、サングラスが片方ずり落ちた。

「……本気ですか？」

「ふふ、どうでしょうっ？」

ユウリはそんな、マクワのらしくない反応を見てくすりと笑った。



カレーを食べ終わりユウリに礼をすると、マクワはそのまま帰って行った。

本当にトーナメントの内容を伝えただけで、ユウリに参加しろとは一言も言わなかった。

だが、その代わりに残っていたアドバイスめいた言葉をユウリは思い出す。

「ユウリさん、これはあなたも察していると思いますが、この場所は既にリーグ委員会にはバレていますので。明日からもおそらくあなたに会うため誰かしらがここに来るでしょう。嫌ならキャンプの場所を移すことです。ですが……あなたが誰かと話したいというのであれば、この場所に留まるのも1つの選択かもしれませんね」

夕方、ユウリは丘の上から湖を眺めながらボーツとしていた。

エースバーンは夕日を背に、湖畔でリフティングの練習に余念がない。

トーナメントエントリー期限まで、あと4日。

マクワに説明されたことのほとんどは覚えてないのに、その事実だけはユウリの心の片隅に引っかかっていた。

もうバトルはする気が無いのに、わたし以外のあらゆるものがわたしにバトルをすることを望んでいる。

マクワはああ言ってくれたが、それでも気が滅入るのは事実。

「どーすっかなあ……」

眩いても、答えは出なかった。

## 4日目（お客様：カブ）

今日は快晴。

ワイルドエリアでキャンプを始めて4日目。

結局ユウリはキャンプの場所を変えることはなく、げきりんの湖のほとりにテントを張っている。その理由はユウリ自身にもわからなかった。

マクワさんの言うとおり、わたしはほんとに誰かに相談したり話したりしたいのかもしれない。

### 【4日目】

昼前、ユウリはキャンプを始めて以来の大いなるトラブルに頭を悩ませていた。

ユウリはすつからかんになったカレー鍋を前にして難しい顔をしている。

横ではいかにもお腹をすかせていそうなエースバーンがやや不満そうな顔をしている。



(食材、使いすぎた……)

そもそもユウリはホップの公共電波私物化とスマホの通知にイライラして思わず家を出てきただけで、ワイルドエリアでそんな長くキャンプするとは思っていなかったの  
でそこまで沢山の食材を買っていなかったのだった。

さらにマリイとモルペコとマクワにもカレーをご馳走したのでさらに食材の減りが  
加速している。

っていうか4日連続カレーってどうよ？ ユウリは恐る恐る腕の匂いを嗅いだ。自  
分の身体からカレー臭がしてたらいいよヤバイ。そもそも飽きてきたし、たまには別  
のものを食べないと体調がおかしくなる気がする。

ユウリは悩んだ末、ワイルドエリアの食料販売所に行くことにした。

今のガラル地方は自分の話題で盛り上がっているらしい以上、人の目が心配だったが  
危険エリアの近くの販売所であればそんなに人はいないだろう。

「エースバーン、ご飯買いにいこっか……」

ユウリがげんなりした顔で言うと、エースバーンはやれやれといった風に頷いた。

恐る恐るワイルドエリアの食材販売所に顔を出すと、幸いなことに他のトレーナーはいなかった。そしてユウリが来たことに対して驚きもなさそうな店員。もしかして色々聞かれるかな、と思っていたので逆にユウリは拍子抜けだった。

「ユウリさんがここに来るだろうことはマクワさんから聞いていたので大丈夫ですよ。勿論ここに来たことも内密にしておきますから」

事情をマクワから説明されていたのか、販売所の店員さんは「大変ですねえ」と苦笑しながらユウリが買った食材の山をひたすら会計していた。

お金は大丈夫。たぶんワットで足りる。

ユウリはマクワに心の底から感謝した。マクワさんってホントイケメンだな。人に興味が無いといいつつフォローはしっかりするのね。ファンクラブ入ろう、マジで。ユウリは心の中で強く決意した。

そしてユウリとエースバーンは大荷物を持って帰路につく。

幸いなことに帰り道でも他のトレーナーに出会うことはなかった。

「フンッ！ フンッ！」

げきりんの湖に戻ったユウリとエースバーンを待ち受けていたのは、テントの前でか

け声で気合いを入れながら腕立て伏せを繰り返す見知ったジムリーダーの姿だった。しかも試合でもないのにユニフォームを着ている。

横ではキウウコンが応援するようにコン、コーンと鳴いていた。

何やってんのこの人？ ユウリは思わず口をあぐりと開けて呼びかけた。

「カブさん、こんなところで何してんですか……」

腕立て伏せをしていたカブは姿勢はそのままにユウリの方を見た。

「おお、ユウリくん！ たまたまトレーニングで通りかかってね！ ちようど良かったからここで筋トレをしていたのさ」

「ええ……？」

いやいや、何をどうしたらげきりんの湖をたまたまトレーニングで通りかかって、わたしのキャンプの前で腕立て伏せをすることになるのだ。どこから突っ込めばいいのかわからない。たぶんカブさんはもう色々取り繕うのがヘタなんだろう。

ユウリは思った。カブさんって結構変なところある。ジムチャレンジで勝って見送りに来てくれた時、街中で大声で「いけいけホップ！ やれやれユウリ！」とか叫ばれたときは正直恥ずかしかつた。もしかしたら天然なのかしれない。

「カブさん、別にそんなことしなくても、普通にわたしに会いに来たって言えばいいじゃないですか……」

「そ、そんなことはないぞ。ユウリくん」

あからさまにカブは歯切れが悪くなった。

ユウリは大きいため息をついた。

ああ、ストレス解消のためにキャンプしてたのに、なんかわたしここに来てからため息ばかりついてる気がする。



「エースバーンくん！ 君も立派になったが……その優しげな表情はラビフットだった時と変わらないな。勝負したときのことか今でも鮮明に思い出せるよ」

カブが感慨深い顔でエースバーンの頬を撫でると、エースバーンも笑顔でそれに答えた。

その様子を見ながら、ユウリはセミファイナルトーナメントで敗退した後にかぶからジムトレーナーに勧誘された時の台詞を思い出した。

『ユウリくん、エースバーンくん。きみたちさえよければエンジンシティで共にさらに

上を目指さないか？　そう、燃え上がる炎のようにね！』

ジムチャレンジを終えた後、ユウリは色々な仕事のオフアーを受け取った。その中で最も熱心にユウリのことを勧誘してきたのがカブだった。ユウリのエースは炎タイプのエースバーンだ。それもあつてカブはユウリに共通点を見いだしたのだろう。

カブもアラベスクタウンのポップラほどではないが高齢のジムリーダーだ。カブにはユウリをエンジンシティジムの後継者として育成する狙いがあつた。ポップラにとつてのビート。ネズにとつてのマリイのように。

ユウリはそれを思い出すと少しだけ心がちくりと痛む。カブさんにも申し訳なかつたけど、それ以上にあのときのエースバーンはかなり乗り気だつたと思う。わたしはその気持ちを見ないふりして断つてしまった。

あくまでユウリはポケモンを所持している以上ポケモントレーナーだ。ゆえに自分のポケモンたちに対して責任を負わなければならない。それはユウリ自身心に引つかつていたことでもある。

わたしはバトルをしないことにした。でもわたしのポケモンたちはそれについてどう思っているのだろうか？



来てしまったものは仕方がないので、ユウリはカブとキュウコンのためにカレーを作ることにした。カブは特にユウリに目をかけてくれていた人でもあるし、邪険には出来ないというのもある。

「しじいカレーです。どうぞー！」

「ありがとう、ユウリくん」

ユウリが選んだのはじゃがいもとにんじんが入った、いたって普通のカレーだった。ただ隠し味として渋みを付けている。決して手を抜いたわけではなく、おそらくカブはシンプルなカレーの方が好きだろうとユウリは予想していた。

そしてその予想は当たっていたらしく、カブはカレーを口に運ぶと美味しそうに口元を緩ませた。

「ふふ、マクワくんにも聞いたが、本当にきみは人の好みを分析することが上手らしいね」

「え、マクワさんそんなことまで言ってたんですか？」

「言っていたというか、僕が聞いたというか……ハハ、マクワくんからきみが今ワイルド

エリアでどうしているのか聞いたんだよ。きみのことが心配でね。余計なお世話かもしれないが……まあ僕ももうジジイなんでね。若者にお節介をしたくなるんだよ」

そう言うとかブはやや白くなった自分の頭をやや恥ずかしそうにぽりぽりと搔いた。心配、されている。

ユウリは内心ほっとした気分になった。どうやら自分以外の全てがわたしにバトルを望んでいるわけではないのかもしれない。

「ああ、先に言っておくと、僕は今きみが直面している問題に関して何か言うために来たわけではないので安心してほしい……とここできみは食べないのかい？」

「い、いや……3日連続カレーでさすがに飽きてきたのでちよつと間を開けようと思つて」

カブはそれにひどく驚いた様子だった。

「それはいけないぞ！ ポケモントレーナーもアスリートだ。栄養は偏らずに均等に取らないといけない。ああ、そのことを知っていたら何かいい食事を持ってきたんだが……」

「アハハ、全然だいじょうぶですよ！ カレーも好きだし……カブさん、ありがとうございます。お気持ちだけ」

ユウリが食べているのはさつきついでに買った野宿用の携帯食料である。決して人

とのランチで食べるようなものではないけれど、さすがに4日連続カレーは厳しい。

そしてしばらく2人で黙々と食事をする。

沈黙を破ったのはユウリだった。

「あの……カブさん。質問してもいいですか？」

「ああ、いいとも。僕で答えられることならね」

カブは柔和な表情を浮かべる。バトル中は燃えるように激しいの一言だが、オフの時のカブは至って温厚な人物である。

「カブさんは例えば……自分が目標としているトレーナーがいきなりバトルをやめてしまったらどう思いますか？ 失望しますか？」

それはマリイのことだ。

ユウリはこれからマリイとの関係をどうすればいいのかよく分かっていなかった。

考えても答えが見つからないので、他の人ならどう考えるか聞いてみたくなる。

「そんなことはない。もちろん優秀なトレーナーが1人スタジアムから去るというのは寂しいことだが、それも1つの選択だからね。僕から何か言えることでもないさ」

カブはいったって当たり前のようにそう言った。ああ、カブさんは同じようなことを今までも経験しているのかもしれない。ユウリは少しだけホッとした。

「僕は永遠の挑戦者だ。炎が燃え上がるように上を目指す！ 死ぬまで修行して学び続



ける。その闘いに終わりはない。誰が目標、と言われたらそれは僕以外のポケモントレーナー全てだ。挑戦者のことも、他のジムリーダーのことも、そしてチャンピオンのことも、僕は等しく尊敬しているよ」

カブのジムチャレンジは特徴的だ。ユウリも経験したことがあるが、スタジアムに挑戦者と同じ出入り口から入場するのはカブだけである。それは挑戦者を自分と同様の立ち位置にいる存在だとリスペクトしている証拠に他ならない。

リスペクト。トレーナーが互いを尊重し、本気でバトルすること。

そんなカブさんなら、答えがわかるだろうか。

それは今でもユウリの心の奥底でチリチリと燻っている疑問だ。今まで見ようとしてこなかった自分自身の気持ち。

ユウリはマクワに言われたことを思い出す。

『——普段なら10手先を見据えるあなたが、8手先までしか読み切れていなかった……本来であれば、あなたにももつと無数に勝ち筋があつたはずだと僕は考えます。なぜ、とは聞きません。ただあなたの調子が悪かつたのでしよう』

それは、事実だ。

でも、わたしが本気だったのも事実。

ホップがわたしを実力で上回つたのも事実。

でも、思い出す。勝負の後、握手する瞬間に一瞬だけ垣間見たホップの表情。

マリイちゃんにはああ言ったけど、あのとときわたしは、多分……。

「あの、カブさん。わたし、あの時、間違ってたんでしょか？」

それはあまりに具体性のない質問だった。それでもカブはそのユウリの質問に心当たりがあつたらしく、神妙な顔で切り出した。

「ユウリくん、きみは3ヶ月前の闘いで『負けを良しとしたこと』を後悔しているのかい？」

「え」

背筋がぞわりとし、顔が強ばったユウリを見てカブはしまったという顔をした。そしてフォローするように慌てて言葉を続ける。

「ああ……言い方が悪かったね。つまりは『無欲の勝利を目指した』と言い換えてもいい。きみはこの言葉を知っているかな？」

「あ、はい。なんとなくは……」

無欲。それは自分の中の勝利への欲求を出来るだけ消し、カみやプレッシャーを減らすことで集中し最大級のパフォーマンスを発揮する心持ちのことだ。無心で闘う。と

も言う。それはポケモンバトルでもトレーナーの間で時たま行われる。

「無欲、無心で闘うことは戦略としては大いにありだ。だが、あの日に關してはホップくんの執念がそれを上回ったに過ぎない。きみがあの日、本気でバトルに相対したことは事実だろう。それに対して申し訳なきを感じているのであれば、気にすることではないよ」

今まで自分ひとりではうまく言葉にできなかつた感情だつたが、カブのその言葉はすつとユウリの心に入つてきた。

きつと、その通りだ。ユウリは思う。

わたしはホップがチャンピオンに駆け上がるストーリーを観る観客でいたかつた。でも、バトルをする以上あの時はむぎむぎ負けるつもりもなかつた。

そんな相反する2つの心持ちが多分わたしの中で無心の戦いを生み出した。

だからこそホップに負けても悔しがることもなく、清々しい気持ちだけが残つただ。だ。

マクワが戦術の面からユウリの戦いを分析したように、カブはユウリのメンタルの面から同じことをしていた。そしてその分析は概ね正しい。

カブは先達のトレーナーとして、ポケモントレーナーとしてのユウリをよく目にかけていた。だからこそ気づくこともある。それは仲の良さとはまた違うものだ。

「カブさん、ありがとうございます。なんか、分かったような気がします」

「それならよかった。そしてさっきは突然お邪魔して悪いことをしたね……本当は今日、きみにこれを渡したかったんだ」

少し安心したように表情を崩すと、カブがユウリに渡したのは一枚のチケットだった。

「これは？」

「きみが知っているかはわからないが……ガラル地方から少し離れたところに、ヨロイ島という場所がある。ガラル地方には生息していないポケモンも沢山いる島だ。ブラッシータウンの駅でこれを見せればそこに連れて行ってくれる」

「……どうしてわたしにこれを？」

ユウリは目をぱちくりしながら聞いたが、カブはその質問には答えない。そしてそのままカブはカレーを食べ終わると、満足したように言った。

「ふう、ご馳走様でした。とても美味しいカレーだったよ。ユウリくん」

カブは椅子から立ち上がり、眼前に広がる広大な湖を見た。ただ、その視線は湖のはるか向こう側を見通しているようだった。

「世界から見ればガラル地方は小さな1地方にすぎない。カントー、ジョウト、シンオウ、イツシユ、カロス、アローラ……僕の故郷のハウエンもそうだが、世界にはまだき

みが出会ったことのない沢山の景色や、見たことがないポケモンがいる」

その視点こそがカブの持つ強さの原点だった。カブはこのガラルでは珍しく、ホウエン地方出身のジムリーダーである。だからこそわかることがある。トレーナーは旅をして世界を知り、強くなるのだ。

かつてカブは目の前のポケモンバトルにのみ固執し、自分を見失い迷走しマイナーリーグ落ちになったこともある。色々なことを体験し吸収し、己を俯瞰して見つめること。その上でポケモンに向き合うことこそがトレーナーとして大切なことなのだ。今のカブは実感していた。

「ユウリくん、世界を見て回り、まだ見ぬものを食欲に学ぶんだ！ きみはまだ若い。どんな選択をするにしても、色々なものを知ってからでもまったく遅くはないんだよ」

「カブさん……」

「いまの君の隣には、頼れるパートナーがいるだろう？」

カブは優しげに笑みを浮かべた。

わたしの横にはエースバーンがいる。

ユウリは思わずその顔を見つめる。エースバーンはニツと自信ありげな表情をしていた。そういえば、この子が本気で嫌な顔をしたところをあまり見たことがないな、とユウリは気づいた。

なんだかんだで、エースバーンはわたしについてきてくれるんだなあ。

実家には戻ったけれど、かつてハロンタウンのただのユウリだった時とは今は違う。バトルをやめても、ポケモンが隣に居る限り、きつとわたしはポケモントレーナーのユウリのままだらう。

ユウリはエースバーンの顔からカブへ視線を戻した。そしてふと思う。カブさんはなんでこんなにわたしに目をかけてくれるのだらう。ユウリは疑問だった。

ユウリは誘いを断つてから、申し訳なさからどこか気持ち的にカブのことを避けていた。もちろん自分から連絡などしていない。それでもカブは自分からこの場所に来て、さらにはユウリを諭すような言葉をかけてくれる。

「あの、わたしがカブさんのお誘いを断つたこと、何とも思っていないんですか？ その、がっかりしたとか」

「ハハハ！ もちろん残念だったよ。でも改めて考えると、きみはジムリーダーなどで収まる器ではない気がしてね。なにより僕のがままできみの可能性を狭めるのは本意じゃない」

おずおずとユウリが言うと、カブは一瞬の間もなくそう言って明るく笑った。言葉通り本気でカブはそう思っているようだった。

ジムリーダーで収まる器ではない。ユウリはカブがそう言う理由を図りかねて反応

できなかった。カブはそんなユウリを見てただ笑みを浮かべる。

「まあ……さつきも言ったように今日の話はこのじじいのお節介だと思ってくれたまえ。トーナメントのことについても、重要なのはきみ自身の心だ。きみが何を考え、どう思っているのかさえ見失わなければ、チャンピオンだろうとその決断は批判できないはずだ」

「そう……でしようか……」

ユウリは目の前に立ちふさがる問題を改めて意識して少し暗い顔になる。するとカブはユウリから湖の方に視線を移して、大きく息を吸った。キュウコンもそれに従う。

「フレフレ、ユウリ！ やれやれ、ユウリ！」

『コン！ コン！ コンコーン！』

湖に向けて、カブとキュウコンが一緒にユウリに大声で声援を送った。どでかい声がユウリの鼓膜にびりびりと響く。

でもここはワイルドエリアだ。周りに人はいない。だから今度は恥ずかしいとは思わなかった。

カブのその声援に込められた優しさが、今のユウリにとってはただ、ありがたかった。



カブが帰ったあと、ユウリとエースバーンは湖のほとりに隣り合って座って夕陽を見ていた。チャプチャプと僅かに湖畔に帰ってくる水が音を立てる。

「世界、かあ……」

ユウリは夕日にカブから貰ったチケットをかざした。

ヨロイ島、一体何があるんだろう。

どんな場所かもわからない。それでもなんとなく、ユウリは気になった。

まだ見ぬ世界、知らないポケモン。もしかするとわたしの知らない楽しいことが、この世界にはもっと沢山あるのかもしれない。

「エースバーンはどう思う？」

ユウリがそう聞くと、エースバーンは立ち上がっておもむろに落ちている小石でリフティングを始めた。要はテンションが上がっているらしい。

それを見てユウリはなんとなくおかしくなって、くすりと笑った。

夕日が地平線に沈み、夜が来る。トーナメントエントリー期限まで、あと3日。



## 5日目（お客様：ソニアとルリナと）

スパイクタウンの入り口のそば。

マリイは粗末なガラクタのようなベンチに座っていた。

天気は自分の心と同じようにどんよりしている。明日は雨が降りそうだ。

ユウリと喧嘩別れして帰ってきたものの、バトルの訓練にも身が入らず、ここ2日間何もしていない。

兄のネズに怒りながらユウリとのことを愚痴った後に特訓しようとして、呆れたように言われたのを思い出す。

『やめておきな。今の調子のおまえでは特訓しても身に入りませんよ』

そんなわけで、マリイはただただやることもなく、スパイクタウンの中だったり、外だったりブラブラしている。昨日はエンジンシティに行つて気になつたオシヤレなカフェで過ごしたりもしたけれど、それでも全く気分が晴れなかった。気紛れにSNSを見ても、トレンドにはいつもユウリの名前があつてモヤモヤする。

はあ、いつもならこういう気分の際はユウリと一緒にどこかに出かけてたのに。気晴らしに行つても何も楽しくない……。

マリイがただただぼーっとしながらベンチで過ごしていると、やがて兄のネズがスカタンクと共に現れた。様子を見に来たんだろうな。アニキなんだかんで過保護だし。マリイは気怠げに兄の顔を見る。

「妹よ、そろそろ頭は冷えましたか」

いつものように不健康そうな顔でそう言うネズの傍らでスカタンクがぶにやあと鳴いた。スカタンクも兄に似てマリイのことが心配らしい。

「冷えるも何も、アニキが特訓させてくれんから何もやることがなか」

「おまえも頑固ですな……誰に似たんだか」

何言ってるんだか。アニキだよ。多分ね。

マリイは心の中でため息をついた。ネズは何度ローズ委員長に圧力をかけられても兼業ジムリーダーを止めなかったし、ダイマックスを使えないスパイクタウンから移動しようとしなかったし、自分自身もダイマックスを使うことはない。こだわりが強く頑固なのはアニキだって同じじゃないか。

「マリイ、おまえにとつてユウリはどんな存在なんですか。ライバルですか。倒したい相手ですか。友達ですか」

「ええ？」

突然ネズはそんなことを言う。意図がよくわからず、マリイは少しだけ考えた。する

と疑問が浮かんでくる。ユウリはあたしにとつてどんな存在なんだろう。いつも一緒に遊んだり、ご飯行ったりして何でも話せる友達？ 絶対に負けたくないライバル？ トレーナーとしての目標？

「ユウリは、あたしの友達で、ライバルで……それで憧れでもあるけん」

マリイは言葉を選びながらそう言った。最近ユウリとご飯食べたり買い物したりすることも多くなって、お互いの性格もジムチャレンジで出会った時よりはずつと分かるようになった。

マリイは思った。ああ、たぶんあたしはユウリと友達でい続けることを望んでいる。だからこんなにモヤモヤするのだ。

「それなら、待ってやったらどうですか？」

「えっ」

ネズは軽い調子で当たり前のようにそう言った。予想外の言葉にマリイは目を丸くする。

「おまえたちはまだ子供ですよ。これからどんな道を選ぶのか、そんなものは今すぐ決めることじゃない。ジムリーダーを継がせたのはおまえがそれに乗り気だったからです。別に他にやりたいことが見つければそつちをやってもいいと思います」

かつてマリイがネズにチャンピオンになる夢を語ったとき、ネズは特に何も言わずそ

ちらを優先させた。ネズもジムリーダーである前にミュージシャンでもある。

ゆえにネズは妹にジムリーダーという職業を強制させるつもりはなかった。ただ好きなことを全力でやればそれでいいと思っている。

「ユウリだって同じです。夢がない、やりたいこともない。大いに結構じゃないですか。そんなものはこれからゆっくり見つけていくことだ。その結果またポケモンバトルを再開することもあるでしょう。それなら、その気になるまで待つてやるのも悪くない。とオレは思いますよ」

「アニキ……」

待てるのか。あるかもわからないその時を。マリイの目には迷いがあった。ユウリがマリイとの関係をどうしたらいいのか分からなかったように、マリイもまた同じ事を思っている。

「心配ですか？ たしかにただ信じて待つ、というのは難しいだろう。だがマリイ、おまえはユウリのライバルである前に友達なんでしょう？ なら、信じてやってもいいんじゃないですか」

マリイははつとしてネズの顔を見た。

それはただ妹を見守る、優しい兄の表情だった。

## 【5日目】

曇りの日に限って、げきりんの湖のほとりは賑やかだった。

『イヌヌワン！』

キャンプの周りではエースバーンとワンパチが追いかけてっこをしている。カジリガメも参加しているつもりだったが、脚が遅すぎて2匹についていくことができていない。

ソニアのワンパチ。

ルリナのカジリガメ。

今日、このキャンプにはソニアとルリナの2人が来ていた。

2人はユウリが朝起きてすぐにここに訪れた。といつてもいつも通りもう昼前である。

「ユウリあんた大丈夫なの？」

来てユウリの格好を見て早々、ジト目でソニアはユウリの全身をじろじろと見た。

その様子を見てユウリはなんだか不安になる。な、何だろう。わたしの体に何かついでるかな。わからない。もしかして人の目を避けてここに来てることを心配してるのか。

「だ、大丈夫。ここならそんなに人来ないから……」

「そうじゃなくて！ ユウリ、あんたちゃんとお風呂入ってる!? 服洗濯してる!? ほら髪もぼつさぼさじゃん！」

「あわわわわ」

ソニアは勢いよくユウリに詰め寄った。前は「きみ」とか「あなた」とか呼んでくれたのに、今のソニアさんはまるでお母さんみたいだ。でもそんなこと言ったら絶対怒られる。

「えっとお風呂とか服はもう、湖でばしやばしやっど……」

ユウリはソニアから視線を逸らしながら歯切れ悪く答えた。

ここ数日、ユウリは水着に着替えて湖で少し泳いでお風呂に入ったつもりになっていた。げきりんの湖は綺麗なので大丈夫だろうという謎の自信。

それを聞いてソニアとルリナはうわあとやや引いたような顔をする。自業自得とはいえユウリは普通に傷ついた。

ルリナが呆れたようにため息をつきながら言う。

「ねえユウリ、このままじゃほんとにあなた野生のユウリになっちゃうわよ？」

「野生のユウリが飛び出してきた！ なーんちゃって……」

「笑えないわね……」

「うう」

ユウリ渾身のギャグもルリナには通じなかった。泣きたい。

このままわたしはワイルドエリアから出られずに野生に帰るのか……。

「まあ、今のユウリの気持ちはわかるからとやかくは言わないけどさ、いつまでもワイルドエリアにテント立てて引きこもってるのは流石に限界があると思うよ。今日だってカブさんに頼まれてわたしたちが来たんだし」

「カブさんに？」

「そうそう、正確にはルリナが、だけど」

「あなたにちゃんとした食事を手渡して欲しいってお願いされたのよ。カレーばかり食べてるからって」

「そ、わたしも心配だからそれに着いてきたってわけ」

ソニアはそう言ってやれやれと手を広げた。ソニアもルリナも今のガラル地方のメディアがユウリの名前一色であることを知っている。街に行こうものなら囲まれてス

マホで写真を撮られまわることだろう。

ユウリは昨日のカブとの会話を思い出した。そういえば栄養は均等に取らなきゃいけないとか言っていたような気がする。

「ということでのこの通り、今日はソニアさん自家製サンドイッチを持ってきたので、あたしたちはここでピクニックをすることにしまーす！」

「曇りだけどね」

ソニアが作ってきたサンドイッチを取り出して見せながらテンション高めで言うと、ルリナが冷静に突っ込んだ。

ユウリはソニアが持ってきたサンドイッチを見た。たまごサンドとかコロツケサンドとか色々ある。お腹が鳴った。ヤバイ。カレーばつか食べてたからめっちゃ美味しそうに見える。

ソニアはユウリのそんな様子を見てニヤリと笑った。

「ふふふ、美味しそうであろう」

「は、はい」

「わたしあんまり料理うまくないからソニアに頼んで正解だったわ……」

ふう、とルリナは軽く息を吐いた。ソニアは料理がうまい。カレー作りの腕もよく、そのことは幼馴染みのダンデがことあるごとに言い言いふらしているのでそこそこの有



名な話だった。



こうして地面にレジャーシートを敷いての女子会が始まった。

「この方がピクニックっぽいでしょ？」というのはソニアの言である。空は曇りだけ  
れど、この丘は柔らかな草原なので地面に座つてもふかふかで気持ちがいい。

ユウリとエースバーンは2人してソニアが作ってきた沢山のサンドイッチを勢いよ  
く頬張っていた。ソニアとルリナはその食欲を見て少しびっくりしている。

「おいしい〜！ ソニアさん、これめっちゃおいしいです！」

「アハハ、流石にサンドイッチでそこまで感動されると思わなかったな……」

うん、これはかなりストレス溜めてそう。

ソニアは笑いながらも心の中でユウリのことを心配した。

エースバーンもここに来てから一番嬉しそうな顔をしている。2人ともカレー以外  
の食べ物に飢えていた。

「ユウリ、さつきソニアも言っただけどあなたこれからどうするの？ 自分では気づいてないかもしれないけど、今のあなたの爆食い見ると結構メンタルキてるわよ」

ユウリはルリナから言われて食べる手を止めた。たしかに言われてみると、わたしかなり疲れているのかもしれない。だいたい普通に旅していたらポケモンセンターに寝泊まりするので、こんなに長い間野宿することはそうそうない。

「うーん……でもやっぱり街に行くのはちよつと気が引けるといっつか」

「まあそうよね……」

ルリナは予想していたようにそう言っただけで、顎に手を当てて考える素振りをする。今のユウリが街に行ったら一般人どころかマスコミからトーナメントの件について聞かれまくって針のむしろだ。

「何かいい手があればいいんだけどね」

「どこかに匿って貰うとか？ でも今っただいたいだこにいてもSNSで特定されたりするから怖いのよね……」

3人とも難しい顔をして考える。でも結局ワイルドエリアにいるのが一番平穏を享受できる気がする。

答えが出ないし、雰囲気が重くなりそうなのでやがてソニアは話を変えることにした。それこそ今のユウリには何も関係ないような話である。

「そういえばさ、ルリナって最近バトルの調子よくなったよね。ほら、ミロカロスしちゃってるって感じ」

「え？ ああ……委員長に、って今は元か。モデルもジムリーダーもトップを目指すって啖呵切っちゃったからね。自分を追い込んだら案外スツと突き抜けたわ」

今季のジムチャレンジが始まる前、ルリナは一時期マイナーリーグ落ち一步手前まで追い込まれたことがあった。兼業ジムリーダーの限界を感じたこともあったが、今はしっかりと勝ちを積み重ねてメジャーリーグで安定している。

「あたしもさ、博士を目指してトレーナー引退しちゃったけど、いざ今博士になってみると……もしかしたらルリナみたいにどっちもやるって選択肢もあった気がするんだよね。後悔してるわけじゃないけどさ」

ソニアは髪の毛の先をくるくるといじりながら言う。それはソニアが思考する時の癖だ。ルリナはそのことをよく知っている。

ダンデをスタジアムに置いていって、別の道を目指したこと。もしかしたら違った未来もあったのではないかと。ダンデに会う度に、ソニアは今でもなんとなくそんなことを考える。ルリナがモデルとジムリーダーの二足の草鞋を履いているからこそ、余計にそう思う。

かつてソニアはダンデの最初のライバルだった。少なくともソニア自身はそう思っ

ている。まあ、ダンデくんはどう思っていたかわからないけれど。

「あら、今からでも遅くないんじゃない？ この機会にトレーナーに復帰してみたら？」  
『イヌヌワ！』

ルリナはいんじゃない、くらの軽い調子でそう言った。

追いかけてここから帰ってきたワンパチはやる気である。

「え〜？ ワンパチもやる気なの？ 今からバトルかあ……どうかな〜」

「ソニアさんも昔ジムチャレンジしてたんですもんね」

ユウリは何気なくそう言った。

ソニアさんとルリナさんはジムチャレンジの同期だったと聞いたことがある。あとダンデさんも。

「ま、もう10年も前の話だけどね」

「思い出すわね。ソニアやダンデやキバナとジムチャレンジで何度も戦ったこと」

「ホントホント！ あの時はみんなしてどつかで会うたびにバトルしてたよねー！ マジで目と目が合ったらすぐバトルって感じだったよ」

「え、キバナさんも同期だったんですか？」

ユウリはサンドイッチを食べながら、知らない情報に少し驚いた。それは聞いたことがなかった。

「あ、ユウリは知らなかったか。キバナくんがダンデくんをずっとライバル視してるのはそれもあるんだよね」

ダンデ、キバナ、ルリナ、ソニア。この4人はジムチャレンジの同期だ。

今ではダンデは元チャンピオンでバトルタワーのオーナー。キバナは最強のジムリーダーと呼ばれるように。ソニアは博士。ルリナはジムリーダーとモデル。

同期4人がみんな順調にキャリアを重ねてやりたいことを実現している。ユウリは素直にそのことを凄いと思った。

ホップ、マリイ、ビート。

3人に比べて、わたしはどうだろうか。

夢もなければ、やりたいこともない。

「みなさん凄いです。わたし、やりたいことがないから……」

ユウリはほんの少し自嘲を込めてそう言った。

バトルをやめて観客に戻ろうと思ったのは、それもある。

やりたいことのないユウリは1人で目標を立てるということができない。ポケモンバトルを始めたのもホップに手を引かれたからだ。

ジムチャレンジが終わり、みんながそれぞれ違う目標に進み出した後、わたしは道がわからなくなった。だから、ポケモンバトルすることそのものにあまり意味を感じなく

なったのだ。

『ユウリくん、世界を見て回り、まだ見ぬものを貪欲に学ぶんだ！ 君はまだ若い。どんな選択をするにしても、色々なものを知ってからでもまったく遅くはないんだよ』

カブさんは、そんなことを言った。

世界を見て回れば、ソニアさんやルリナさんみたいにキラキラした大人になれるだろうか？

「ユウリさ、いつそウチの研究所の助手にでもなってみる？ いま人手足りないんだよ  
ね」

「あら、ウチの事務所でモデル目指すのもいいわよ。ユウリはそういう意味でも光るものがある気がするし」

すこし表情が陰ったユウリに、2人は冗談めかしてそんなことを言う。それはソニアとルリナなりの優しさだった。ユウリの前には無数に道が存在している。ポケモンバトルだけが人生ではないのだと。2人は暗にそう言っていた。

ユウリと同じ年の頃は、ルリナもソニアも目の前のことに夢中で先のことなど何も考えていない子供だった。きつとダンデもキバナもそうだったろう。順調なキャリア、外からはそう見えても、それは目の前に突然現れたきつかけを偶然手に取って、ただ走り続けただけにすぎない。

ユウリが顔を上げて2人に喋ろうとした。その時だった。

「ユウリ！」

聞き慣れた友達の大声が少し遠くから聞こえた。

ユウリが声のした方に顔を向けると、息を切らしたマリイがそこに立っていた。随分と走ってきたらしい。

ルリナとソニアは何事かとびっくりしていたが、それにも構わずマリイは一直線にユウリの前にずんずんと歩いてくる。そして、

「ごめん！」

ぺこりとユウリに頭を下げた。

なんだなんだ。ユウリが言葉を発する前にマリイは話し始めた。

「あたし、自分のことばかり考えてユウリの気持ち、考えようとしてなかった。友達なんだから、怒るより先にユウリの話を聞いてあげなきゃダメだった。いつもユウリがあたしの愚痴聞いてくれてたことも忘れてた。だから、本当にごめん」

一気に喋って、マリイがユウリに謝る。そして少しの間。

マリイが何が言いたいか。ユウリも理解した。

マリイちゃんとわたしは友達だ。わたしもそう思っている。

でもそれ以前に、マリイちゃんがわたしとバトルしたいのは本音のはずだ。

「マリイちゃん……でも」

ユウリが申し訳なさそうに呟くと、マリイはがばつと顔を上げた。

その表情に迷いはなく、ついこの間垣間見た狂気のような執着も消え失せていた。

「だから、待つことにした！」

「え」

待つ。その言葉にユウリは固まった。予想外。その反応はネズにアドバイスされた時のマリイと同じだ。

「ユウリがこれからやりたいこと見つけて、余裕ができてバトルする気になるまで、あたい待つよ。もちろんいつでもいい。何年後でも、いつまでかかっても、大人になったあとだったとしても、それを楽しみにしてるけん」

「大人になっても……？」

ユウリは戸惑った。大人になった後のことなど、自分自身にもわからない。バトルを再開する保証などない。それでもマリイは待つという。



「待てるよ。だって、ユウリはあたしの友達だから」

ユウリの戸惑う様子とは裏腹に、そう言ってマリイは自然に笑った。

その時ユウリはびつくりした。言葉に、ではない。その表情。笑顔の練習を頑張つて  
するくらい、マリイちゃんは笑うのが苦手だったはずだ。

「マリイちゃんが笑った!?!」

「えっ?」

マリイの表情がぼかんとして素に戻った。すかさず隣のモルペコがジャンプして、マリイの口元を引っ張って笑顔を作ろうとする。

「むぐぐぐぐ」

「アハハ! マリイちゃん変な顔!」

マリイの顔はひきつっていた。ユウリはそれを見てケラケラと笑った。

そんな2人のことをソニアとルリナは微笑ましい顔で眺めていた。

「いいね、若者の友情は」

「思いつね、昔のこと」

昔はバトルに勝ったり負けたりする度にわたしたちも喧嘩してたっけ、ソニアとルリナは顔を見合わせて笑った。

「ああもう、やめなモルペコ!」

マリイはモルペコを顔から引きはがすとべしつと軽く額にチョップした。モルペコは反省する様子もなくニヤニヤと笑っている。そこでソニアがぱんつと両手を叩いた。「さ、じゃあマリイちゃんも来たことだし、このソニアさんがとっておきのカレーを作つてあげよう！ ユウリ、手伝つてくれる？」

「あ、はい！」

「ちよつとソニア……ユウリがカレーばかり食べてるつていうからわたしたちここに来たんじゃないか？」

「大丈夫大丈夫！ わたしたちが持つてきたサンドイッチをゼーんぶユウリに食べてもらつて、その代わりにわたしたちがカレー食べれば丁度いいでしょ！」

「ああ、そういうことね……」

要はユウリにカレー以外のものを沢山食べさせたいつてことだろう。ルリナは苦笑いしながら納得した。

「あたしたち2人が揃えばリザードン級間違いなし！ ルリナもマリイちゃんも期待しているからね！」

ソニアはそう言うといたずらっぽくウインクした。

そしてソニアとユウリはカレーの準備をするためにいそいそとテントの方に向かう。ルリナは仕方ないな、という顔をした。ソニアは本当にカレーが好きだな。

「サンドイッチのはずがカレーランチになっちゃったわね」

「ご飯食べに来たわけじゃないんだけどな」

なんか自分が食い意地を張っているように見える気がする。マリイは少しだけ恥ずかしくなった。マリイは既にここで昼ご飯を食べるのは2回目だ。

「気にしなくていいんじゃない？ 女子会よ女子会。それにここならカフェみたいにも写真撮られるなんてこともないし。恥ずかしいコトなんて何も無いわ」

ジムリーダーはタレントのようなもので、外でご飯を食べているだけで一般人に無断で写真を撮られることも珍しくない。ルリナはそれにもう慣れていたが、決して気持ちのいいものではなかった。

「そうかな……3日前もユウリのカレー食べたし、なんか食い意地張ってるみたい」

「えっ」

マリイが恥ずかしそうに言うと、ルリナは目を丸くした。ああ、この子は別に1人が好きってタイプではないのか。ルリナはマリイとまだそこまで話したことがなかった。割とクールなキャラかと思っていたのである。

「アハハ！ そんなこと？ ただでさえジムリーダーなんてストレスの塊みたいな仕事なんだから、むしろ普通よりたくさん食べるくらいで丁度いいわ。太る心配なんてするだけムダ！ バトルすればその分抜けてっちゃうんだから」

「ん……頑張ります」

「頑張り、新米ジムリーダー」

少し硬い顔で言うマリイにルリナは微笑んだ。マリイは悪タイプを使う攻撃的なジムリーダーだけれど、こうして話してみると初々しい普通の女の子にしか見えない。自分も10年前はこんな風だっただろうか？

ルリナは新鮮な風を感じながら空を見上げた。

人の目を気にしていいのはなかなかリラックスできる。普段被写体としてモデルの仕事をしているルリナは余計にそう思った。

曇り空だけれど、なんだか楽しいピクニックになったな。

外でキャンプしながらご飯を食べるなんて久しぶりだろう。モデルを始めてから昔みたいに野宿することもなくなってしまった。

ルリナは久しぶりにかつて自分が旅をしていた時のことを思い出して、カレーの準備をするソニアとユウリを見ながら懐かしそうに笑った。



一通り女子会を楽しみ、早くも夕方。

ユウリが3人を見送ろうとすると、マリイはいつも通りのきりつとした表情でユウリに話しかけた。

「ユウリ、あんたがトーナメントに出ても、出なくても、あたしはあんたの選択を尊重するけん。だから……迷ったらあたしがあんたにしたみたいに、相談してほしい。人の目が気になるならスパイクタウンに匿ってやることもできるからさ」

「あ、それでいいじゃん！ わざわざここにいらなくてもさ」

「確かにスパイクタウンなら安心よね」

名案を得たようにソニアとルリナはマリイの案に同調した。スパイクタウンの住民は全てネズとマリイの息がかかったエール団だ。統率が取れている以上、ほとぼりが冷めるまで街ぐるみで人の目やマスコミからユウリを遠ざけることもできるだろう。

だがユウリは首を横に振った。

「ありがとう、マリイちゃん。でも、あと2日だけここで考えてみたいんだ」

エントリー期限まで、あと2日。

もちろん、トーナメントに出よう。と思ったわけではない。

『明日からおそらくあなたに会うため誰かしらがここに来るでしょう。あなたが誰か

と話したいというのであれば、この場所に留まるのも1つの選択かもしれませんがね』

それはマクワから言われた言葉だ。たぶん明日と明後日も、きつとこの場所に誰かが来るだろう。ユウリは思った。誰が来るかはわからないけれど、話してみたい。

話すことで、自分の何かが変わっていくかもしれない予感があった。

マリイちゃん、マクワさん、カブさん、ソニアさん、ルリナさん。

ここで5人と話して、わたしの心はなんだかちよつとだけ前向きになってきている。なんとなく、そんな気がした。

## 6日目（お客様：ビート）

3ヶ月前。

「ユウリ、あなた……どうして負けたんです？」

ホップがファイナルトーナメントの1回戦を迎えた日のこと。

駅前広場を通過してシユートスタジアムに向かっていったユウリの前に、ビートは突然現れてひどく怒った顔でそう言った。

「どうして……」

どうして、負けは負けだろう。そこにそれ以上の意味があるのか。

「僕に勝ったトレーナーがあんなどころで負けるなどありえません。一体何があつたんです。あなたの実力はそんなものではないでしょう！」

納得できないようにビートはユウリに詰め寄る。

ビートが着ている服はアラベスクタウンのジムトレーナーのものだ。ユウリはビートの剣幕にやや引きながら察した。きっとあれからアラベスクタウンのジムトレーナーになったのだろう。

ビートはラテラルタウンの壁画を崩壊させるテロ行為を行ってからジムチャレンジを剥奪され、ナツクルシテイで彷徨っていたところをアラベスクタウンジムリーダー・ポプラに誘拐された。

その後の動向はユウリも知らなかったが、今こうしてビートは久しぶりにユウリの目の前に現れた。

「僕とバトルしなさい！ 今、ここで！」

「は……？」

言っている意味がわからずユウリは思わず眉をひそめた。なんだなんだ、トラブルかと広場にいた人達がこちらをちらちらと見る。

視線を無視して、ただユウリの調子にビートは業を煮やした。この女は自分が何でこんなことを言っているのが理解していない。

「責任を取れと言っているんです！ オリヴさんに言われて、委員長のためにねがいぼしを集めて！ それなのに委員長からは見捨てられて！ ワケのわからないバアさんに連れて行かれたと思ったら無理矢理フェアリータイプの修行を毎日させられて！ この通りジムリーダーにもされてしまいましたよ！ これも全て、あなたに出会ってから……あなたにバトルに負けてから、僕の人生はムチャクチャだ！」

「え、ビートあんた、ジムリーダーになったの……？」



ジムリーダー。ユウリは素直に目を丸くして驚いた。

恐るべきことにジムチャレンジを失格になってから今までの短期間で、ポプラに代わってビートはアラバスクタウンのジムリーダーになったらしい。ビートは心底嫌そうに言うがそれは異常なことだとユウリでも理解できる。

「ええ、まあ、エリートの僕の実力をもつてすればその程度当然ですが……今はどうでもいい。あなたにメチャクチャなことを言っているのはわかっていますよ。でもね、あなたとの因縁を終わらせなければ……僕はこの先に進めないんだ！」

ビートは大声でそう言う。ユウリはひどく絶望的な気持ちになった。

メチャクチャなこと、とは言うけれどたぶんこれはわたしのせいだ。目の前のビートも。ホップが昨日あんな目でわたしを見てきたことも。

きつとわたしがあまりにもジムチャレンジの中でみんなをぶちのめしてしまったから、こんなことになってしまったのだ。きつとビートもわたしに負けなければ、本人が言うとおりのこんな風になることもなかっただろう。でも……。

「いやだ」

「……ッ!? なぜですー！」

ユウリは即答した。

ビートの顔が引きつるが、それに構わずユウリはひどく平坦な調子で言葉を投げつけ

る。

「わたしもさ、負けたばっかでそういう気分じゃない。だから因縁っていうならわたしに勝ったホップと戦うべきだよ。ビート、ジムリーダーなんでしょ？ それならファイナルトーナメントに出て、ホップに勝ちなよ」

突き放すような棘のある言い方。ユウリはビートの思っていることや、自分に突っかかってくる理由も分かっていた。だからこそ、目を背けたくなかった。

今のバトルの舞台を降りようとしているわたしでは、きつとビートを満足させることはできない。

でも、ホップなら？

ホップはラスボスみたいな悪役だったわたしを負けさせてくれた。それならきつと今のビートのことも納得させてくれるかもしれない。それは根拠もない人任せの勝手な言い分。

ユウリもそれが他人に責任を押しつけるひどい行為だと分かっていたが、それでも今ユウリはビートと闘いたくなかった。わたしは観客に戻るって決めたんだから、そういう面倒くさいものとももう関わりたくない。

もちろんそんな言い分ではビートは納得しない。

「わからないのか!? 僕が戦いたいのはホップじゃない! 因縁のあるあなたです!」

「そっか、大丈夫。ホップはきつとその因縁っていうやつごと、ビートをきつと倒してくれるよ」

軽薄な笑みを浮かべながらそう軽く言うユウリに、ビートは言葉を失ってただ呆然となった。

(これが本当に僕を圧倒的な強さでぶちのめしたあの女か?)

ビートには今のユウリのこと、かつて自分とバトルをした時のポケモントレーナーとはまるで別人に見えた。

まるで何かを失ったような、全てを諦めているような。

かつて自分とバトルしたときのような、ホップと一緒に居たときのような、冒険とバトルを楽しんでいた明るい女の顔はそこにはなかった。

ひどく安心したような顔をしているのに、絶望を秘めた暗い瞳でユウリはビートのことを見つめている。

「それじゃあね。トーナメント、応援してるよ」

ビートがただ立ち尽くしていると、話は終わったと言わんばかりに背を向けてユウリはシユートスタジアムへ向かった。

今になってユウリは思う。その時のわたしは、ひどく嫌なやつだったと。

【6日目】

着替えて目を擦りながらテントの外に頭を出すと、しとしとと小雨がユウリの髪を濡らす。

もしかして雨が降りそうだな、と昨日の天気を見てユウリが思っていたらその通りで、今日のげきりんの湖は雨が降っていた。

そこまで強い雨ではないけれど、そのまま外に出れば濡れるのは確かだ。テントの中の荷物にあった傘をさしてから外に出る。

するといきなり背後から声をかけられた。

「ふん、どこに行つたかと思えば寝ていただけとは。待ちくたびれましたよ」

「ピート」

ユウリがびつくりして思わず変な声を漏らす。思わず背後を向くと、そこにはユウリ

が今一番会いたくないと思っっている人間がそこにいた。驚きで思わず声を漏らす。

「ビート……」

「やあ、お久しぶりですね。日々鍛錬を続け進化するエリートの僕と違って、あなたは随分とだらしない生活を送っているようだ」

そう皮肉を言っつて、トレードマークのピンク色の傘をさしたビートはユウリをひどく馬鹿にするように鼻で笑った。

ただ、そんな態度にもユウリは特に腹を立てることはない。ビートは会う度にこんな風な捻くれた調子なので、いちいち怒っつてはこちらの気が持たない。気分は良くないけれど。

「何しに来たの……？　こんな雨の日に」

そう言っつてユウリはビートの顔から目線を逸らす。そのままキャンプの近くに生えている大きな樹を見やると、その下でエースバーンが休んでいた。やっぱり炎タイプなので雨の日だとそこまで元気がない。

ビートはユウリにとつて最も会いたくない人間の一人だ。

嫌いなわけではない。ただ、3ヶ月前にあんなことを言っつた手前とかく話しづらい。

「ハア……あなたがジムリーダーにずいぶんとカレーを振る舞っつていると聞いてね……

僕は心底どうでもいいんですが。バアさんが食べたいから貰ってこいとうるさいんですよ。今のあの子のカレーはさぞピンクで美味いだろうさ。とかなんとか言ってるね」

「ええ……？」

ビートは心底嫌そうな顔でそう言う。言っている意味はわからないが、ユウリは魔女のようなポプラの高笑いを思い浮かべた。わざわざ雨の日に来させるのも狙っているような気がする。考えるだけで能力が二段階ダウンしそうだ。

「ま、まあカレー作るのはいいけどさ。ビートはどうするの？」

「言っただけでしょう。僕は今のあなたが作るカレーに興味はありませんし、心底どうでもいいことです」

「はあ」

ユウリは否定されまくってちよつぴり悲しい気分になった。でも前ビートにひどいこと言っちゃったしそれも仕方ないかなと思っっている。それに申し訳なさもあるし、作ってあげないわけにもいかない。

「じゃあ……雨の中だけゴメン。ちよつと待っていてくれる？ わたしもまだ起きたばかりだからさ」

「見れば分かりますよ。ですがあまりエリートの僕を待たせるのはやめてもらいたいのですね」

「はいはい。エースバーン！ ご飯作るよー！」

ため息をつきながらビートの煽りを流しつつ、ユウリは樹の下で休んでいたエースバーンを呼んだ。

はあ、誰かと話せるからここにしようと思ったけど、こうなるならマリイちゃんの言うとおりスパイクタウンに行った方がよかつたかもしれない。



「あのさあ、ビートこれホントに食べるの？」

「食べるのは僕ではありません。バアさんです」

簡易テントを張ったテーブルの上。

持ち帰り用の大きめのタッパーに入れられたカレーを見ながら2人はなんとも微妙な顔をしていた。

あまくちホイップカレー。

カレーの中に白いホイップが盛られているそれは、まろやかを通り越してもはや甘さ

と辛さが融合して合体事故を起こしている。

はつきり言ってますあまり美味しそうなさそうだし、ユウリはレシピでは知っていたが作ったこともなかった。ただこれを作れというがポプラの要望らしかったので仕方がない。

「ポプラさんこんなの食べるのか……これがピンクってことなのかな」

ユウリはわけもわからずそんなことを言った。そもそもピンクって何なの？

「さあ……バアさんの考えていることは大して理解できませんからね。まあ、出来としてはレシピ通りでいいんじゃないですか？ バアさんに代わってお礼を言ってあげますよ。ありがとうございます」

「え!？」

ユウリはびっくりした。ひねくれ者のビートが普通にお礼を言うなんて思わなかったのだ。

「え、なんです……？ そんな驚いて」

「いやいや、だつてビートが素直にお礼言うなんていままでなかったじゃん！ どうしたの？ 悪いものでも食べた？」

「ちよ……なんですすいきなり気持ち悪い！ このカレーを食べたなら別ですが僕はいつも通りですよ！ こちらから一方的に押しかけた以上礼を言うのは当然でしょう」

ビートは本気で気持ち悪がっていた。何がおかしいのか分かっていない様子だ。



ユウリはふと思う。ビートにかつてひどいことを言ったのに、普通にわたしに話しかけてきてくれている気がする。それどころか前より角が取れているような。

そこでユウリはビートがここに来てから思っていた疑問を投げかけた。

「ね、ビートさ……今すごい普通に話してるけど、その、わたしに怒ってないわけ？」

「はあ？ 何のことです」

「その……3ヶ月前にわたし、あんたにひどいこと言ったから」

ユウリがぎこちなく言うのと、ビートはようやく思い出したようであざ笑うように口を開いた。

「フン、あんなことはもうどうでもいい。あのとき僕は『委員長のために始めたジムチャレンジ』にけじめが付けたかったです。相手など結局誰でも良かったのかもしれない。あなたの言うとおり、ホップに負けたことで納得したのかもしれないね」

あの日ユウリと別れた後、ビートは正式な手続きを踏むことなくファイナルトーナメントに乱入し、ホップと闘い、負けた。それがビートの心に何か変化を与えたのか。

「僕を泥の中から引き上げてくれた委員長には感謝していますが……今の僕は与えられたものや他人には左右されない。自分のことは自分で決めます。なのでお気になさらず。あなたの感じている罪悪感に価値なんてない」

ビートはただ淡々とそう話した。本気でそう考えているのだろう、とユウリは思う。

不思議とこの言葉からはいつも感じるような嫌みは感じなかった。

「ビート……やっぱりちよつと変わった？」

「何も変わりませんよ。強さ、地位。僕はいつも欲しいものは自分の力で掴み取ってきた。まああの時は必要ないと思いましたが……今のジムリーダーの位も与えられたものじゃない。僕がバアさんを利用して手に入れたにすぎません。チャンピオンの名声もじきに手に入れるつもりです」

そんなことを言いつつ、なんだかんだでビートとポプラはひねくれもの同士良好な師弟であることは有名だった。

ポプラさんに誘拐された時はあんなに嫌がってたのに。照れ隠しなのかなあ。ユウリは内心ツツコミたくなつた。言うと怒るから言わないけど。

「まあ変わったと言えば、今日のようにバアさんのワガママの世話をするくらいですかね」

ビートはやれやれといった風にそう言った。そこでユウリは気づいた。きつとビートを変えたのはホップとの勝負ではなくポプラとの師弟関係なのだ。

「ユウリ、このカレーの礼ついでに、1つあなたに忠告してあげましょう」

「え？」

突然ビートは佇まいを直してユウリにそう言った。それは冗談ではなく本気の合図

だ。

「世論や委員会の言い分などどうでもいい。トーナメントに参加しなくても、数ヶ月すればあなたの名前など世間は忘れるでしょう。その程度の思惑に動かされるのはクソ食らえだ。今のあなたがいなかろうが僕は特に困りません」

誰かの思惑に動かされる。かつてビートはローズ委員長に認めてもらいたい一心で動く人形だった。そして今のビートにとつてそれは最も不快なこともある。

ユウリはただその言葉を聞いていた。ビートらしいな。と思う。

遺跡を破壊しジムチャレンジ資格を剥奪され、ポプラお抱えのジムトレーナーに収まったかと思いきやファイナルトーナメントに乱入し委員会から嚴重注意を食らう。

はつきり言つてユウリから見てもビートはめちやくちやな男だし性格も悪い。ルールを破りまくるその性格から現実でもネットでも誹謗中傷もたくさんされていたのは事実だ。

でも今ではアラベスクタウンのジムリーダーだ。その強さは誰もが認めている。逆境を跳ね除ける力を誰よりもビートは持っていることをユウリは知っていた。

「それに別に僕とあなたは友達ではありませんからね。だがホップだけは違う」

「え」

いきなりホップの名前が出てきて一瞬ユウリの頭がフリーズする。

「ホップはあなたのことしか見ていませんよ。例の放送でよく分かったんじゃないですか。チャンピオンのくせに、バカみたいじゃないですか？　口では兄が偉大すぎるのだのなんだのと悩んでいると見せかけて、結局のところ彼の世界にはあなたしかいないのです」

あなたしかいない。

ユウリはかつてのハロンタウンでの生活を思い出す。たった一人の幼馴染み。ホップとは毎日顔を合わせて遊んでいた。幼い頃、外で遊ぶときはユウリとホップだけの二人だけの世界が確かにあった。

『なあユウリ！　オレたち、鍛えあつて2人でチャンピオンを目指すぞ！』

—— いっしょに？

『だってオマエはオレのライバルだぞ！　当然だろ！』

思い出して、ユウリははっとした。

それはホップのささやかな夢だったのかもしれない。

わたしがホップが頂点に駆け上がる映画を見たいと思つたのと同じように、ホップはわたしとライバルのまま、ずっと高みを目指し続けたかったのだ。

「だから、チャンピオンと決着をつけられるのもあなただけです。誰も手伝えることではありません。ま、いいんじゃないですか？ あなたたちの関係がどう言ったものかは知りませんが……この機会に君たちはしつかり話し合うべきだ」

「しつかり、話し合う？」

それはビートなりの同期に向けた優しさだった。

ユウリ、ホップ、マリイ。

ビートにとつてジムチャレンジの同期とは決して友達ではないが、内心で認めた好敵手でもある。ビート自身はそれを悪くない関係だと思っていた。

「何がわからないのです。当たり前の話でしょう」

ビートはポプラと修行する間にいつしか自分に足りないものを理解していた。それは自分と同じくひねくれ者であるポプラに振り回されることによって、鏡を見るように得た教訓である。

何を考えているのか分からない相手のことはとにかく会話を重ねることではしか理解できない。ようやく最近ビートもポプラが何を考えているのかその一端が見えかけていた。

ビートはユウリの表情を見た。少し怪訝そうな顔をして考える素振りをしている。

（バアさんが僕をここによこしたのも、もしかするとユウリとこういいう話をさせるため

なのかもしれませんね……）

しつかり話す。ユウリはビートの言葉を聞いてふと思った。

幼馴染だから。親友だから。

振り返ってみると、お互いわかっているつもりで、大切なことは話し合ってたように思う。

わたしとホップはどんな関係なんだろう。

幼馴染み、親友、ライバル。

考えても、どれも正しい気がする。でも、その言葉一つで言えてしまう関係でもないように思う。分からない。分からない——？

そこまで考えてユウリはなんとなく気づいた。

ああ、そうか。わからないから、不安なのだ。

ホップも、そしてわたしも。

あの時ホップはテレビでわたしを指名することでバトルの場に無理矢理引きずり出そうとしたし、わたしはそれに対してムカついて逃げた。

それはきつとお互い何を考えてるかわからなくて不安だからだ。

心の奥底では本音で話していないから、お互いの考えていることがわからない。考えてみればそんなのは当たり前前の話だ。

「わたし、話さなきゃいけない。ホップと」

「ようやく理解しましたか。そんな簡単なことに」

ユウリはそれを自然に言葉に出していた。対してビートはつまらなさそうに言う。

ビートにとつて本音をむき出しにして話すなど当たり前のことだ。人に気を遣うことなど知らないし必要ない。それがビートの考え方だ。

「放つておいてもホップは向こうからここに来るでしょう。まあ今回のチャンピオンの行動は僕からしてもいけすかない行為なんでね。向こうから釈明に来るのが筋だと思いますよ」

ビートはそう言うとしニカルに笑った。他人の思惑になど乗らない、自分こそが正しい。きわめてビートらしい言葉だった。

「本当に来るかなあ」

ビートはそう言うが本当に来るだろうか。自分からホップのもとに話に行つた方がいいんじゃないだろうか。やきもきさせてるだろうし。ユウリはなんとなくそう思う。

「それに、わたしまだトーナメントに出るかどうかも決められてないし……」

そこまで言つてユウリはハツとする。

トーナメントに出る気が無い自分が、いつの間にか出るかどうか、というところまで考え始めている。よくよく考えれば、出たくないなら大事になる前にさっさと欠場の連

絡をしていればよかったのだ。なのになわたしはそれをしなかった。

「ハッ、まだ迷っているのなら賭けをしてみればいい。ホップがここに来なければあなたはトーナメントに出場しない。出場するかどうかはホップの釈明を聞いてから考えてやってもいいとね。どうです。シンプルでいいでしょう？」

「アハハ、ビートらしい」

「それ、褒めてませんよね？」

あまりの上から目線。ビートらしすぎてユウリはおかしくなつてくすりと笑った。そしてやがて笑うのを止めると、そこにはきりつとした顔をしてビートを見るユウリの姿があった。

ビートは初めて満足そうにユウリの瞳を見た。

「——ふん、立ち直りましたか。安心しましたよ。あなたの目は死んでいなかった」

ユウリはそこで気づいた。たぶん、ビートもマリイちゃんと同じで、待っていてくれたのだと。

ユウリはビートへ笑顔で笑いかけた。

「うん。ありがとう、ビート。持つべきものは友達だね！」

「だから僕はあなたの友達ではありません！ 宿敵です！ ライバルです！ いいですか？ 立ち直ったのであればいずれ僕とも本気の勝負をして貰いますからね！」



「えーどーしよつかな〜まだバトル再開するとは決めてないしな〜」  
「あなたねえ……」

軽口を叩くとビートはやれやれとこめかみを押さえた。

それは軽口じゃなくて事実だ。待ってやろうじやないか。家を飛び出す前、ホップに腹が立ったのは確か。仕掛けてきたのはそつちからだろう？ ホップの思惑にただ乗ってやるだけではつまらない。

そう、腹が立った。きつと3ヶ月前のあの時も。

ユウリは思う。わたしはあるときホップに清々しい気分で負けたと思っていただけだ、気がつかなかっただけで悔しく思い、挫折していたのだ。

ユウリがホップがチャンピオンに駆け上がるキラキラしたストーリーを見たかったというというのは本当のことだった。でもそれは決して自分の夢や目標みたいなものではなく、きつとなにもない自分自身への諦めに似た何かから生まれたものだ。

『——バトルする理由がないから、バトルしないだけ。やりたいこともない。なりた  
いものもない。ただのバトルが強いだけしかとりえのない女がわたし』

ユウリはマリイに言った言葉を思い出した。

マリイちゃんに言ったように、わたしにはバトルが強い以外なにもない、と思っていた。みんなのラスボスみたいな風になっていた自分のことも嫌だったけれど、それでもわたしはきつとポケモンバトルが強い自分自身にどこか誇りを持っていたのかもしれない。

負けたことで安心したけれど、その後自分が何者でもなくなるのが怖かった。

皆に置いていかれたまま、ただのハロンタウンのユウリに戻ることが怖かった。

だから観客になることで自分を納得させて、わたしは自分の心を守ったのだ。

でも、もしかしたら、そんな必要はなくて。

マクワさんからカレー屋になればと冗談で言われたように、

カブさんから世界を旅するよう勧められたように、

ソニアさんが助手に誘ってくれたように、

ルリナさんがモデルの事務所に誘ってくれたように。

色んな人と話してみて思えた。

わたしの前にはきつとたくさんの道があるし、もしかするとそんなことを怖がる必要はなかったのかもしれない。

エントリー期限まで、あと1日。

ユウリは目の前の景色が開けたような気がした。

## 幕間（ダンデとキバナ）

バトルタワー。ダンデの自室。

チャンピオンが交代してからしばらく経ったある日、突然訪れたホップからダンデはぼつりところ言われたことがある。

「アニキはさ、オレに負けた時悔しかったか？」

「……いきなりどうした？ まあ、もちろん悔しかったが……今ではお前という弟を持てたことを誇らしいと思っっているぞ」

ダンデは弟の突然の質問に一瞬怪訝そうな顔をしたが、ニツと笑いかけながらそう答えた。その表情に嘘はない。

ホップはダンデに勝った瞬間のことを思い出す。確かにあの時、アニキは帽子を深く被つて一瞬表情を隠した。きっとその裏で悔しい顔をしていたのだろう。

でも、ユウリは？

『ホップ、おめでどう！』

ホップはチャンピオンになってから心に何か穴が開いた気分だった。3ヶ月前、自分に負けたユウリが浮かべたあの笑顔が頭から離れない。心からほつとしたようなあの

表情。

ユウリのその反応を見て、ホップは素直に喜ぶことができなかつた。

おめでとう。と言われる裏で、負けさせてくれてありがとう。勝つてくれてありがとう。そんな風に言われているような気がした。

隣で歩いていたと思っていたら、いつしか自分の遙か先を歩いていた幼馴染み。そして自分が一番勝ちたいと思っていたライバル。

ホップは思う。きつとオレはアニキよりユウりに勝ちたかつた。だからユウリがそんなことを思っていると考えたくなかつた。

そしてユウリはやがてスタジアムに姿を現すことはなくなつた。いつも隣にいた幼馴染みの親友は、いつのまにか遠いところへ消えてしまった。

「ホップ……何か悩みでもあるのか？ チャンピオンとしての仕事が忙しくて疲れているのなら、俺からリーグ委員会に仕事を減らしてもらえよう口添えしておくが……」何も言わずに暗い顔をしているホップの表情を見て、やがてダンデが心配そうに声をかけた。ガラルリーグチャンピオンはガラル地方のアスリートの頂点にして象徴である。たとえそれが子供だったとしても多忙であることには変わりない。前チャンピオンであるダンデはそのことをよく知っている。

するとホップは目を細めてダンデと視線を合わさないままぼつりと呟いた。

「アニキ……ユウリあいつ、オレに負けた時、笑ってたんだよな」

「ホップ、お前……」

ホップはどこか遠い目をしていた。ダンデははっとした。きっとこれは俺が今予想していたことで悩んでいるのではない。もっと根深く暗いものだ。そう、かつて俺も同じようなことを経験した。

ダンデは言葉をかけようとするが、言葉が続かない。ただ何も言えないまま、ホップの表情を、心配そうに見つめるしかなかった。

1人は、寂しい。



『ユウリ！ スタジアムで待つてるぞ！』

部屋のテレビの大画面の中で、指をさして幼馴染みの名前を呼ぶホップの姿をダンデは見つめていた。

口に運ぶコーヒーがいつもより苦い。

やはりか、と思う。

ユウリがああのブラックナイト騒動、正しくはセミファイナルトーナメントが終わってからバトルの場から退いていることはダンデも知っていた。

ゆえにこんな風に無理矢理引きずり出すような真似をするのは、例えチャンピオンだとしても、相手が幼馴染みだとしても配慮の足りない行動である。

ただ、ダンデにはそれでもこんなことをするホップの気持ちがわかってしまった。ホップは孤独なのだ。

共にチャンピオンを目指した幼馴染みがバトルをやめていなくなってしまったことが、その背に重くのしかかっている。

コーヒーを飲み干すと、ダンデは深くため息をついて、机で頭を抱えた。

（ああ、俺が強いのか。俺が負けたせいで、弟にチャンピオンの絶望的な孤独を強いるのか）

——そう、ホップじゃなくてユウリがチャンピオンになってくれていたなら。

「……ッ!？」

そこまで考えてダンデはぞつとする。それは弟の思いを踏みにじるような悪魔のよ

うな思いつきだ。それを打ち消すように両手でぴしゃりと頬を叩く。

かつて弟に負けるまで、ダンデは無敵のチャンピオンだった。

以前は色々なトレーナーがダンデに勝負を挑んできた。ダンデはそのことごとくを打ち倒したが、それでも諦めずに何度も何度も挑んでくるトレーナーも多かった。戦うたびに強くなる相手と戦うのはとても楽しかった。骨のあるトレーナーばかりだった。

ダンデはいっしょか思った。彼らなら、いつか俺を負かしてくれるかもしれない。

だが、3回、4回、5回、何度も打ち倒すたびに、徐々にダンデに再戦を挑むトレーナーは減っていった。聞けば、ダンデに勝つことを諦めてトレーナーをやめた、トレーナーとしての限界を感じた、だから別の道を選ぶというではないか。

そんなことがいくつも積み重なって、やがてダンデは背筋がぞつとする気分になった。暗闇に1人放り出されるような不安に襲われたのだ。

——みんな行かないでくれ。俺を1人にしないでくれ！

ダンデは不安だった。ただ無敵と褒め称えられるだけの孤独なチャンピオンになることが、かつてはただ恐ろしかった。

ただ、今の自分は違う。ダンデはホップがインタビューを受ける前にテレビに映って



いた男のことを思い出す。

『——勿論チャンピオンに勝つつもりでいつも闘つてはいますがね、オレ様のライバルが前チャンピオン・ダンデであることには変わりありませんよ』

チャンピオンを退いた後も、以前と同じことを言うそのトレーナーのことを。



「——次会うときはバトルしよう。俺は誰が相手だろうと容赦しないぜ」

ガラルメジャーリーグ、1位のジムリーダーと行うタイトルマッチ。

やや遅刻したダンデはアーマーガアを飛ばして、1人の金髪の少年と一緒にフィールドへ降り立ち、そう言った。病弱そうな少年だったが、その青い瞳に秘めたキラキラした情熱はやがて彼も強いポケモントレーナーになることを予感させる。

「よおダンデ、尻尾巻いて逃げ出したのかと思つたぜ」

そして、フィールドを挟んで向こう側にいるキバナがやれやれといった風にダンデに呼びかけた。

「すまん、遅刻した」

「へっ、オマエが遅刻するのはいつものことだが……ライバルたるこのオレ様を待たせるとは、少し気合いが足りないんじゃないやねえの？」

「そう思うか？」

「……いいや。そんなこともなさそうだな」

ダンデはキバナの瞳をまっすぐに見つめた。それを見てキバナは口角をつり上げて、寧猛な笑みを浮かべる。

キバナ。10年前、ダンデと共にジムチャレンジを巡った同期。

キバナだけは違ったのだ。

10回、20回、数えることをやめるほど闘って負け続けても、それでもキバナはダンデの前から去ることはなかった。そして今この時も。

この男なら、いつか俺を打ち砕いてくれるかもしれない。

チャンピオンタイムを終わらせてくれるかもしれない。

ダンデはマントを脱ぎ捨て、モンスターボールを手にした。

その表情は闘志に燃え、ただ、目の前の挑戦者とバトルをする喜びに満ちていた。

——以前、ダンデはふと思ひ、キバナに聞いたことがある。

もし俺がキバナに負けたら、一体チャンピオンになったキバナの前には誰がいるのだろう？

「キバナ、一つ聞きたいことがあるんだが……お前、俺に勝つたらどうするんだ」

「どうするものにも、オレ様が新チャンピオンになるだけだろ。その時は勿論、オマエがオレ様に勝つことだけを考える最強のライバルとして挑んでくるわけだ。たとえオレ様がオマエに勝とうと、オレ達の関係は変わらねえ」

「……」

キバナは当たり前のことのように淀みなくそう答えた。

ダンデははつとする。ライバル。そうか、そういうことか。

思ってみれば不思議だった。かつてジムチャレンジを始めた頃はソニアがライバルだったように、セミアイナルトーナメントではキバナがライバルだったように、ライバルという存在が俺にもいたのだ。

いつからだろう。チャンピオンになってから、俺はただ挑戦者を打ち倒すだけの機械のような存在になっていたのかもしれない。

「だからダンデよ、このキバナ様以外のヤツに負けることは許さねえぞ？」

キバナは世間話でもするかのような、いつも通りの表情でそう言う。だがその瞳には

火の玉のような執念が宿っていた。それを見てダンデは小さく笑みを浮かべた。

心配は杞憂だったようだ。

俺は、決して孤独ではなかった。

ライバルがいてくれるかぎり、俺はいつまでもチャンピオンタイムを演じよう。目の前のこの男が無敵のチャンピオンを打ち砕くまで。



今季ファイナルトーナメント、決勝。

その日。スタジアムは異様な雰囲気にも包まれていた。いくらかの歓声に混じるとよめき、戸惑い。

ダンデは追い詰められていた。残されているのは自分の背後にいるキョダイリザードンだけ。

前を見る。弟の顔が見える。自分と同じ金色の瞳が静かにこちらを見据えている。その背後にはダイヤモンドスしたゴリランダー。なぜだろう。タイプ相性では確実に有

利なのに、恐れさえ感じていた。

——もしかして、負ける。

そう思っているのはダンデだけではない、多くの観客が息を呑む。10年間続いたチャンピオンタイムが終わりを告げようとしていた。

頭の中であの男の姿がちらつく。何度負けても立ち向かってくる男。ただ1人自分のことをライバルと呼ぶ男。今あいつはどんな顔でこのバトルを見守っているのか。

そう。たとえ相手が弟であろうと、あいつがオレを倒すまで、俺は負けるわけにはいかない。ダンデは自らを奮い立たせて叫んだ。

見ていろ、キバナ。

「まだ、まだだ！ チャンピオンタイムは終わらない！ いや……終わらせないッ！」  
その時、久しぶりにダンデは心の底から負けたくないと思った。

## 7日目(1)(お客様：ダンデ)

その日、ユウリは珍しくいつもより早い時間に目覚めた。

テントの外に出ると、眩しい朝日がユウリの顔を眩しく照らして、思わずユウリは手のひらで光を遮った。

「今日は晴れかあ……」

昨日雨が降っていたので、それが続かなくてほっとする。

湖畔を見ると、今日もエースバーンが小石でリフティングをして朝練をしていた。エースバーンは起きるのが早いなあ。いつもわたしより先に起きてるし。いつも朝ご飯遅くてごめんね。ユウリは少し申し訳なく思う。

「エースバーン！ おはよ！ 今日ちよっと早めに朝ご飯食べようか！」

エースバーンがユウリの方を振り向いた。その顔は心なしかいつもより嬉しそうで、ユウリは少し苦笑いした。

エースバーンが湖の方から駆けよってくる。しかしその足が突然ぴたりと止まった。

「エースバーン？ どうしたの？」

ユウリは怪訝な声を出す。それに答えるようにエースバーンは空を見上げた。

その時、風が吹いた。

上を見る。そこにあつたのは大きなポケモンの影だ。大きな音で翼を羽ばたかせながらここに降りてくる。それは見知ったポケモンのもの。

「ユウリ、久しぶりだな！ 朝早くすまない！」

リザードン。そしてその背に乗った大柄なトレーナーがユウリに声をかけた。その姿はガラル地方のトレーナー、いや、トレーナーじゃなくても住んでいる人なら誰もが知っている。

「ダンデさん……」

ユウリは静かにその名を呟く。

チャンピオン、ダンデ。そしてリザードン。

わたしにポケモンを与え、ジムチャレンジに推薦し、ポケモントレーナーになるきっかけを作ったホップのお兄さん。

その2人が、7日目の朝早くに訪れたお客様だった。

〔7日目〕

「ダンデさん、どうしてここに？」

ユウリはテーブルに向かい合って座っているダンデに素直に疑問を投げかける。正直ユウリはダンデがここに来るとは思わなかった。来るなら昨日ビートが言っていたようにホップだと思っていたので、意外に思う。

ユウリの思っているとおり、ダンデは少し難しい顔をした。何か理由を探しているよ  
うな、そんな顔だった。

「そうだな……理由はある、と言えはある。だが今は、君とただ話に来た。というのではダメか？」

「え、それは別にいいですけど……」

ユウリは戸惑った表情を浮かべてそう言うが、ダンデはほつとしたような顔をした。

ユウリは意外に思った。かつて猛々しいチャンピオンだった時に比べて、今のダンデからは穏やかな雰囲気か漂っている。着ている服もかつてのユニフォームではなく、どこか気品があるゆったりしたものだ。

ユウリがダンデの姿をなんとなく観察していると、やがてダンデは近くでリザードンと仲良く遊んでいるエースパーンののこを見やった。

「ユウリ、覚えてるか？ 君にヒバニーを、ホップにサルノリを渡した時のことを」



「え？ あ、はい」

「あのときはまだ2人のことを俺はただの子供だと思っていた。チャンピオンを退いた今思うと……あのときは随分偉そうなことを言っていたような気がするよ。今や君たちは最高のパートナーとポケモントレーナーだ。エースバーンを見ればそれがわかる」

「ポケモン、トレーナー……」

ユウリはその言葉を反芻する。

ダンデさんから見て、今のわたしはポケモントレーナーなんだろうか。乗り気なエースバーンのことを見て見ぬ振りをして、カブさんの誘いを断り、実家に戻ったわたし。そんなわたしは、エースバーンのことを本当に心から大事にできているのだろうか？

『——ポケモンを連れていけば、誰もがポケモントレーナー！ ホップ、ユウリ。いいか！ ポケモントレーナーは、ポケモンを闘わせ育てるんだ。そしてパートナーのポケモンを信じる！ 心から大事にするんだ！ それを忘れるな！』

旅に出る前の話。ホップの家で初めてヒバニーを貰って、ホップとバトルした時にダンデに言われたことをユウリはよく覚えている。

「そう、君はポケモントレーナーだ。たとえバトルをやめても、それは変わらないだろう」

「そうかな……わたし、もうエースバーンのこと闘わせてないし、旅に出る前にダンデさ

んに言われたとおり、本当にエースバーンのこと大切に出来てるのかなって思う時、あります」

ユウリのやや申し訳なさそうな表情を見て、ダンデの瞳が揺れた。ああ、俺はホップにチャンピオンを背負わせてしまったのと同じように、ユウリをそのライバルにしたことで深い悩みを与えてしまったのだろう。

「ユウリ……本当にすまない」

「えっ!?! ちょ、ダンデさん突然どうしたんですか」

突然ダンデはユウリに頭を下げた。ユウリは心当たりがなかったただ戸惑うだけだったが、それでもダンデは頭を上げなかった。そしてやがて言葉が続ける。

「今日は君に謝りに来たんだ」

ようやく頭を上げたダンデの表情はひどく申し訳なさそうな、後悔しているようなものに見えた。

「オレはかつてユウリがホップが強くなるための都合のいいライバルでいてくれれば良いと思っていた。悪い言い方をすれば当て馬だ。ホップがチャンピオンを目指すためのモチベーションとして、幼馴染みの君がいてくれれば良いと……あの時はそう思ってたんだ。だから君にヒバニーを渡したし、ジムチャレンジの推薦もした……ひどいやつだろう? ガラル地方の誇り、無敵のチャンピオンが笑わせる」

「ダンデさん……」

呆然としながらユウリはダンデと初めて出会った時のことを思い出した。

心当たりがないわけでは、なかった。

ブラッシータウンにダンデさんが来て、ホップが早くポケモンを貰いたいからつて先にハロンタウンに走って行ってしまった時。何気なく、本当に何気なくダンデさんは呟いた。

——良い競争相手がいれば、アイツももつと強くなるのにな。

「そうだったんですね……」

「ああ、今君が陥っている状況にしてもそうだ……本来なら君が自由に決められるはずの人生を俺の身勝手ゆがめてしまった。君にホップのライバルであることを誘導して強いたのはこの俺だ。本当に、すまない」

そう言つてダンデはユウリの顔をまっすぐに見た。ダンデはユウリがバトルをしなくなつたことに対して、それはかつて自分が無理矢理ユウリにポケモントレーナーであることを強いた反動だと思つていた。だからこそ、今は何を言われても仕方がないと思つている。

「——ううん、ダンデさん、ありがとうございます。」

「え?」

ダンデはぼかんとして口を開ける。ダンデがそんな表情をするのを始めて見たのでユウリは少し笑いそうになったが、それを抑えて言葉が続けた。

「だってダンデさんがいなかったらわたし、エースバーンとも出会えませんでしたよ? 旅することだってなくて、今まで出会った人達ともきつと知り合えませんでした。マリイちゃんやビートとも、きつと友達になんてなつてなかった。確かにわたしはホップのライバルになりたいとは思ってなかったけど……」

そこまで喋ってユウリはこの1週間で気づいたことを思い出した。

1週間前までは、ただホップやみんなの活躍を見るだけの観客に戻りたかった。わたしはただのハロンタウンのユウリだったころに戻りたいと思っていた。でも、今はきつと違う。

「最近気づいたことなんですけど、たぶんわたしはポケモンバトルが好きだったんだと思います。それを通じてホップのそばにいられたことが嬉しかった。ただのハロンタウンのユウリのままじゃ、たぶんそれはできなかつたんじゃないかって。今はその時に戻りたいとわたしは思いません。だから、あのととき知らない世界への扉を開いてくれたダンデさんには、本当に感謝してます」

ユウリは思う。きつと、今までの出会いがあつて今のわたしがあるのだ。だからそれを否定しちやダメだ。

マリイちゃんやビートが会いに来てくれたように、マクワさんやカブさんが道を示してくれたように。ソニアさんやルリナさんみたいになかつこいい大人の女性に出会えたように。それ以外だつて、わたしは旅でいろんな人やポケモンと出会つてきたじゃないか。

「ユウリ……君は、すごいな」

ダンデはそう語るユウリの顔が煌めいて見えた。俺が子供の頃はこんな風に立ち止まれただろうか？ ただ勢いのまま突き進んで、見落としてきたものも沢山あつたんじゃないだろうか？

「え、そ、そんなことないですよ!? わたしなんかより自分の夢に向かつて頑張つてるホップやマリイやビートの方がずっとすごいじゃないですか」

「いや……そんなことはないさ。しつかり立ち止まるべき時は立ち止まれる。それは本当に難しいことだと思つて」

ばたばたと恥ずかしがるユウリの顔を見ながら、ふと、ダンデは最初のライバルだったソニアの顔を思い浮かべる。俺はきつとソニアのことを置き去りにしてそのまま大人になつてしまった。それを後悔しているのかもしれない。

ソニアが博士を指すと言ったとき、少しだけ裏切られたような気持ちになったのをよく覚えている。でもそれはきつと逆だ。俺が何も見ずに突き進んだことでソニアを裏切ったのだ。

——ダンデくんって、ほんとバトルのことしか考えてないよね。

昔、ソニアから呆れ顔でそんなことを言われたことがあった。あの時はなんとも思わなかったけれど、今になるとソニアが自分にそう言った意味がなんとなくわかる。

今、ダンデは後悔はしていない。でも、失ったものは多いと思っている。

チャンピオンという立場に邁進し、そして最後に残ったのがキバナとの絆だったんだろうと。

「チャンピオン……か」

「……？」

ふとダンデは物憂げに呟いた。随分と疲れたような表情で言うので、ユウリはすこしぎよつとした。かつて10年チャンピオンの座を守り通した男がそんな表情をすることは思わない。

「俺も最近気づいたことがあるんだ。当たり前前の話かもしれないが……ポケモンとの関

わり方は千差万別だ。ポケモンが好きでも、バトルをしない人だっている。当たり前前の話だろ？ でも自分に立ち向かってくるトレーナーを増やしたい、ガラル地方のポケモンリーグを盛り上げたい。あの頃はそれだけを必死に考えていて、オレはそんなことも見落としていたんだ」

ここにいるのはユウリとエースバーンとリザードンだけだ。街にあるカフェのように人間はいない。誰にも話を聞かれることはない。だからこそダンデは己の本音を話していた。

それに対してユウリはやや首を傾げながら言った。

「それって……しようがないんじゃないですか？」

「え？」

「だってダンデさん、チャンピオンだったんだもん。ポケモンリーグを盛り上げたいって思うのは当然じゃないですか。今そう思うのはきつと、チャンピオンやめたからですよ。そもそも10年もチャンピオンやってたらそうなりますって」

「そうかな……あまり意識はしてなかったが……」

「そうですよ！ わたしも3ヶ月ポケモンバトルやめたから何となくその気持ちわかります。あ、でもホントの自分に気づいたのはここ1週間の話なんですけどね……アハハ」

そう言ってユウリは苦笑いした。それを見てダンデは微笑みを返した。かつてチャンピオンだったときには決して浮かべない、柔らかい笑みだった。

「ダンデさんってそんな風に笑うんですね」

「え、そうか？ 俺は割と笑う方じゃないか？ それにチャンピオンになってからは明るいキャラになるよう意識してたんだが……」

「……アレ、キャラ作りだったんですか？ もしかしてリザードンポーズとかもそうだったりして」

ユウリがすこし意地の悪い顔でそう言うと、ダンデはただただ苦笑いした。

「ああ……あれはな、代名詞になるポーズがあると盛り上がるからってローズさんから提案されてやってたんだよ。まあ何か難しいこと言わなくてもリザードンポーズすればみんな盛り上がってくれるから、俺は楽だったんだけどな！」

ワハハと笑うダンデにユウリの顔が凍り付いた。聞いてはいけないことを聞いてしまったような気分だった。ユウリは表情を引きつりながら言う。

「……ダンデさん、それ絶対ホップの前では言わないでくださいね!! 多分めっちゃ落ち込みますよ!」

「そ、そうなのか？ それは困るな……」

ユウリが必死に言うのと、ダンデは露骨に困った顔をした。



兄でもあるが、それ以上にチャンピオン・ダンデという存在に憧れていたホップにとつてその事実はきつとショックだろう。なんせボールの投げ方から丸パクリするくらいなのだ。弟の心兄知らずだなあ、とユウリは心の中でため息をついた。

その時、ぐう、とユウリのお腹が鳴った。

「あ」

もしかして聞こえたかな。ユウリはやや顔を赤くしてダンデの方を見た。そういえばご飯も食わずにダンデさんと話してたんだった。お腹が減るなんて当たり前だ。

「ユウリ、いい腹の音を鳴らすじゃないか！ そうだ、今日はお邪魔した礼に俺がカレーを作ろう。君のカレーは美味いらしいが、ソニア仕込みの俺のカレーも負けてないぜ！」

「ダンデさんほんとサイッテー」

「なにい!?!」

ダンデはジト目で言うユウリにびっくりして驚愕の声を上げた。そんなコミカルな様子を見てユウリはくすりと笑った。



「ダンデさんのカレー、めっちゃ美味しいですね!？」

「そうだろう。俺だつて昔は旅するジムチャレンジャーだつたんだぜ。カレーの作り方もソニアがよく教えてくれたんだ」

ダンデは懐かしげな顔でそう言った。エースバーンとリザードンも美味しそうな顔でカレーをばくばくと口に入れている。

ユウリはカレーを食べながら一昨日のことを思い浮かべる。確かにソニアさんのカレーの味に似ている気がする。でも違うのはあらびきウルストを乗せてることと、すこしだけ甘いことだ。たぶんダンデさんは甘口でお肉多めのカレーが好きなんだろう。そういえばホップの好みもそんな感じだったつけ。

「ダンデさんとソニアさんって昔一緒に旅してたんですか?」

「いや……そんなつもりはなかったんだが、俺があまりに道に迷うからっていつもソニアがついてきてくれたんだよ。あの時は迷惑をかけたな……」

「ええ……」

うわあ、この人バトル以外のことホントにダメなんだな。引率の先生じゃん。ユウリはドン引きした。ソニアさんがたまにお母さんっぽい部分を見せるのはもしかすると

ダンデさんのせいかもしれない。

「フ、でも……安心したよ」

「えっ？」

カレーを口に運びながら、ふとダンデは優しいな声音で呟いた。

「ああ、ユウリ。今日君と話して確信した。正直……君がホップのライバルであることをやめた時、ホップがチャンピオンの孤独に押しつぶされないか心配だったが、君たち2人なら俺とキバナとは違う答えが出せるだろう」

「ダンデさんと……キバナさん……？」

ダンデとキバナがライバルだということはユウリも知っている。でもそれとは違う答えとは一体どういうことだろう。

「俺とキバナはお互いただ1人だけのライバルだ。その関係には終わりはないだろう。だがそれは死ぬまでお互いポケモンバトルの世界で戦い続けることを意味する。お互いがお互いに勝つためだけに人生の全てを賭ける。そんな不毛な関係だ。だが無敵のチャンピオンだった俺にはそれが救いだった」

ユウリは息を呑んだ。嫌でもホップとわたしが必要な関係になる未来を想像してしまふ。ダンデさんがホップで、キバナさんがわたし。そんな暗すぎる関係をユウリは求めていない。

「俺はその関係に後悔はない。ただ……立ち止まってしつかり自分のことを考えたユウリなら、きつと弟を違う場所に連れて行ってってくれるんじゃないかと思ったんだ。すまない。また君に重いものを背負わせてしまうかもしれない」

そう言うダンデの表情には少し陰があった。きつと申し訳ないと思っっているんだろう。だからユウリは自信を持って言うことにした。カブさんやビートが教えてくれたように、わたしの思っていることをちゃんと話して、話し合えばなんとかなるはずだと。「大丈夫です! わたしもホップも、ちゃんと話します! それで、ライバルでもなくて、幼馴染みでもなくて、親友でもないかもしれないけれど、わたし達の新しい関係、ちゃんと見つけますから!」

ダンデはユウリの自信に溢れた顔を見た。きつとこの子なら、かつて孤独を感じていた自分と同じようになってしまった弟のことも、明るい場所に連れて行ってくれるかもしれない。

負けてなお、ダンデの中ではホップは手のかかる弟に変わりはなかった。

「弟をよろしく頼む」

「はい、ずっと一番近くで見えてきましたから」

ユウリは笑顔でそう言った。

ダンデは思った。きつとこの子は俺の知らないホップの表情をたくさん知っている

のだろう。

その時だった。

「アニキ……？ ユウリも、こんなとこでなにしてんだよ？」

あまりに聞き慣れた声。ダンデとユウリが勢いよく声の元に顔を向けた。

来ると思っていた。だからユウリは驚くこともなかった。

「こんなとことはホップもひどいね。ここはわたしのキャンプ地だというのに。ユウリのカレー屋、絶賛開店中！」

「ご、ごめんだぞ」

ユウリはあまりにも普通にホップに絡んだので、ホップは少し驚いたようで素直に謝ってしまう。それに対してユウリはにへらと笑った。

「へへ、じよーだんだよ」

ホップの強ばった顔がすこしだけ柔らかくなった。少しはリラックスできただろうか？

さあ、それじゃあ最後の闘いを始めよう。

ユウリは己の心に祈った。きっとわたし達が新しい関係を見つけられますようにと。

## 【完】 7 日目 (2) ～ 30 日後 X 日目

「リザードン……ここはブラッシータウンの上じゃないか」

帰り道、空を飛びリザードンにダンデはしまったという顔で呼びかける。いかん、また迷ったのか。ダンデは思ったが、リザードンはチラリとこちらを見てただ頷く。

間違つてない。ダンデはハツとした。

ダンデの脳裏にソニアの顔がちらつく。今では本まで出版し、博士になったという。ダンデはふと気づく。お祝いは送ったが、最近会いには行つてない。その間にオレもチャンピオンを退いて、バトルタワーのオーナーになった。

10年前のあの頃からずいぶん時間が経つたように思う。あの時俺は目の前のことばかりに夢中でソニアを置いていつてしまったけれど、今なら、もしかしてアイツらのように新しい関係を始められるのだろうか。

「リザードン……そうだな、会いに行こう。ソニアに」

ダンデはリザードンの背を撫でた。するとリザードンは機嫌良さそうに大きく咆哮し、一直線に研究所へと向かった。

今なら、昔みたいに笑顔で話せる気がする。

## 【7日目(2)】

時刻は11時を回っている。

いつもならちようどユウリが起きる時間帯だった。

ダンデはカレーを食べ終わると、特に2人には大したことは言わずにリザードンに乗って帰った。

ホップはまた迷子になると指摘したが、それでもダンデは今日は絶対にまっすぐ帰れと言つて聞かなかつたので、そのまま渋々ユウリとホップはダンデとリザードンを見送ることになったのである。

ゆえに、いまこのげきりんの湖にいるのはユウリとホップだけだ。

テントの方では、空気を読んでエースバーンとゴリランダーが仲良く遠目で2人の様子うかがっていた。

2人は湖畔に座つて、無言のまま少し間を空けながら隣り合っている。

ユウリはげきりんの湖を見た。たまにポケモンが頭を出して波紋を作るだけで、危険



エリアとは思えないほど静かに水を湛えている。

先に口を開いたのはホップだった。

「ユウリ、その……」

「うん」

「……ごめん。あんな風にユウリの名前を出したのは、流星にやりすぎたぞ……。オレもまさかこんなことになるとは思ってなかった」

ホップはまずユウリに謝った。例の公共電波私物化の件である。これについてはユウリも内心腹が立っていたので、頬を膨らませてホップの顔を見た。

「ほんとそうだよ！ ホップがあんなことするからわたし1週間もワイルドエリアにいなきやいけなくなつたんだからね。このままじゃ野生のユウリになっちゃうじゃん！」

「ほんとごめん」

ホップはただただ申し訳なさそうに身体を縮めた。そんなホップの様子を見ているのは少しだけ面白い。ただそのおかげで自分にとつて大切なことを学んだことも事実なので、ユウリはそれ以上追究することはなかった。

「まあ……それについてはもういいよ。それよりもホップさ、わたしに言いたいことがあるんじゃないの？」

何気ない調子でユウリは続ける。ホップの顔が少しだけ強ばった。きつとホップは

わたしに言いたいことが沢山あるんだろう。いったい何から言うのかはわからないけれど。

少しの沈黙。

おもむろにユウリはそばに落ちていた小石を湖に投げた。ぼちゃん。と音がする。はよ言え。

「ユウリ、オマエ……オレに負けた後、どうしてオレの前からいなくなったんだよ？」

「……………」

「オレは……ユウリと一緒にチャンピオンを目指したかった。オレがチャンピオンになっても、ユウリはずっとオレに挑んできてくれる。ずっとライバルとして高め合えるって思ってたんだぞ。でも……そうはならなかった。オマエは実家に帰ってオレの前からいなくなった」

それは根本的な問いだ。ホップは思う。なぜ自分の前から逃げ出した。旅をする時に一緒にチャンピオンを目指すって約束しただろう。1人で何も言わずに逃げ出すなんて卑怯じゃないかと。

ホップの揺れる瞳を見据えながら、ほんの少し迷ってユウリは口を開いた。

「ごめんね。わたしにも理由はあったの。でもそれに関しては悪いと思ってる。わたしが1番ホップに謝らなきゃいけないのは……理由を言わずにバトルをやめたこと。」

だからそれを今から話す」

ユウリは言葉を切つて、口をきゅつと結んだ。あまり自分の恥ずかしいことは言いたくない。でも、言わないと始まらない。勇気を出さなきゃ。

「わたしね……たぶんホップに負けたとき、すつごい悔しかったんだ。今までそのことに気づかなかつただけで、わたし、バトルがホントは好きだったみたい。でもホップのチャンピオンになる夢を応援したかったのもホント。だから、きつと自分が悔しかったことをごまかしてたんだと思う」

ホップは何も言わずただユウリの顔を見ていた。

「でも、ただわたしはバトルが強いだけで夢も目標もなかった。だからまっすぐに自分のやりたいことを語って、進んでいく皆のことが……ちよつと羨ましかった。だから、それを見ないようにしたくて家に戻ったの。みんなについていくだけの情熱が、わたしにはなかつたんだ……」

ユウリはそう言うのとホップの顔から目を離して湖の方向を見た。それはユウリの根っこにある劣等感の塊のような感情だった。自分には、何も無い。そう思ったわたしはいつの間にか無気力になっていたのだろう。

「もしかして、ユウリ……オマエずつと無理してたのか？」

「えっ?」

「オレのライバルになったことも……しんどかったのか?」

ユウリはホップに向き直った。ホップは泣きそうな顔をしていた。違う、そうじゃない。

そうなんだけど、そうじゃない。

みんなのラスボスみたいになっていたことに嫌気や無力感を感じていたことは事実だけど、それはただのバトルの結果だ。決して、無理をして振る舞っていたわけではない。

「ううん、嬉しかったよ」

「そう、なのか?」

「うん。ほんと。ホップの横で一緒に走り続けて、ホップがチャンピオンを目指すのを見ながら一緒にバトルしたりするのは、すっごい楽しかった。その中でわたしがホップにとって一番の倒す敵みたいになっちゃったのはガツクリきたけどさ……アハハ」

「オレは……ユウリに負けるのが悔しかった。いつか勝つんだってずっと思ってたぞ。いつの間にかユウリを倒すことがアニキを倒すことより大事だと思うようになってた」

「うん、知ってる」

ホップはさらりと言うユウリの顔を見た。その表情はどこか困ったような顔をしていた。

「ホップはさ……きつとわたしのヒーローだったんだと思う」

「え？」

ホップが怪訝そうな顔で思わず聞き返した。オレがヒーロー？ オマエの？

「ダンデさんにポケモンを貰って、ジムチャレンジに推薦して貰ったけど、それでもわたし一人じゃきつと旅なんてすぐ終わっちゃったと思う。それでも最後まで色んな街を巡って、色んな人と出会って、最後までジムチャレンジができたのはホップがわたしの手を引っ張ってくれたから。ホップがわたしを知らない世界に連れて行ってくれた」

そうしてユウリはホップにニッコリと笑いかけた。昔からだ。一緒にいたずらして怒られたときだって、近づいちゃいけない森に行ったときだって、いつだってホップはわたしの手を引っ張って色んな所に連れて行ってくれた。

「だからホップはわたしのヒーローだった。でも、もうこれ以上ホップに頼り続けたらわたしもダメだねって思っちゃった」

「ユウリ……」

「たぶんわたしも、これからちゃんと自分でやりたいことを見つけなきゃいけないんだと思う。——ね、ホップはチャンピオンになったこれから何をやるの？」

ホップは急に聞かれて意表をつかれたような表情になる。オレは、チャンピオンになって、これからも色んなトレーナーとバトルして、ユウリともずっとバトルして、そ

れで……。

その先に一体何がある？ 頂点を取ったあと、オレはどこを目指せばいい？

ホップはたった今その暗闇を覗いて自分の抱えていた感情の正体を知った。そうだ、何をしたらいいのかわからない。ずっと目標にしてたユウリに勝つて、アニキに勝つて、チャンピオンになって、わけもわからず毎日色んな仕事をする中で、いつしか自分が何をしたかったのか分からなくなっていた。

「わからない……わからないから、オレはユウリに隣にいて欲しかった。一緒に隣でずっとライバルでいて欲しかった」

ホップは不安そうな顔でユウリに訴えた。ユウリにずっとライバルでいてほしい。ずっと隣で、手を繋いで歩み続けて欲しい。それが今のホップの願いだった。

ユウリはそんなホップの顔を見た。

「そっか……わたしはこれからもホップのライバルにはなつてあげられるとは思う。でもね、ずっと隣に居てあげることができななんだよ。わたしはわたしだけのキラキラした夢を見つきたい。今はホップとも気軽に会えるけど、きつと大人になったらなかなか会えなくなる時が来るんじゃないかな」

ユウリはどこか悟つたようにそう言った。かつて皆が夢に向かって色んな方向に走り出しているのを感じたように、いつかわたしもどこか違う方向に走り出す時が来るの

だろう。きつとその時はホップとも違う関係になっていくのだろう。

「ユウリ……オマエ、やっぱりいなくなるのか？」

「ううん、話は最後まで聞いて。だからさ、ホップも自分だけの夢を見つけようよ。それこそわたしと一緒にさ！」

ユウリは力強くホップの手を取った。

「一緒に……？」

「そう！　これが初めてわたしからホップに挑む競争！　どっちが先にキラキラした夢を見つけるか！　ホップが前、わたしとチャンピオンになる夢を競ったみたいだね！」

ホップはポカンとした顔をしている。それはさながら、いつもホップにぐいぐい手を引かれていたユウリのような反応だった。今はそれと全く逆の構図である。

「勝負だ!!!　ホップ!!!」

ユウリは力強く言った。これがわたしの答えだ。

わたしは、決めた。

今まで観客だったわたしは、これからわたし自身が主役になった映画を歩んでいく。やがて大人になった後でも、おじいちゃんとおばあちゃんになった後でも、マリイちゃんやビートも巻き込んで、みんな自身が主役になった映画をそれぞれ語り合えるときが来ればいい。

ホップは今まで感じたこともないユウリの剣幕にたじろいでいたが、やがて落ち着いた表情になると、ため息をついた。

「まったく……ユウリは普段はおろおろしてるのに、たまに強情なところあるからびつくりするぞ……」

「ふふ、でもそういうところも分かってるでしょ？ 幼馴染みなんだから」

「ああ、そうだな」

そう言つてホップはいつも通りニシシと笑つた。この憎たらしくて一番大事な幼馴染みの勝負、乗つてやろうじゃないか。

ホップは思つた。たぶん、オレはユウリが何も言わずに遠くに行つてしまうことが怖かつたのだ。でも話してわかつた。きっと、ユウリとオレの関係は終わることがない。いろんな風に変えて、きつと大人になつてもそれは残つていく。今はそれがわかつているだけで十分なのかもしれない。

暫く2人で笑い合つていると、ふとユウリが思いついたように言つた。

「ねえところでホップ。チャンピオンつてそんなに重いものなの？ いつも元氣元氣なホップが落ち込んじゃうくらい」

「オマエな……オレをどう思つてるんだよ。そうぞ。ユウリは知らないだろうけど、チャンピオンの仕事は大変なんだぞ。家にもまともに帰れないし。連絡すらするヒマ



無いときあるし。アニキもそうだったろ？」

「そういえばわたしに全然メッセージしなかったもんね。やっぱり忙しすぎるのか……」

ホップのげんなりした顔を見て、ユウリは最近スマホに来るホップからのメッセージが露骨に減少していたことを思い出した。

「そうなんだよなあ。夢を見つけるっていつても、正直そのヒマがないのが現実だぞ……」

「うーん……だからっていきなりチャンピオンやめます！　なんて言えないし、ホップはそんな気はないでしょ？」

「流石になく。というかチャンピオン自体はオレの目標だったし、大変でもアニキから受け継いだ手前そんな簡単に投げ出したくないぞ」

「ふーん……あ、そうだ」

複雑そうな表情を浮かべるホップを尻目に、ユウリは突然あることを閃いた。それは天啓に近い何かに思えた。

ユウリが閃いたのは、ガラル地方全てを巻き込むようなメチャクチャな計画だった。それでもなんとなくユウリは今の自分ならそれができるような気がした。

なんだろう。あんなに人をバトルでぶちのめしまくるのがうんざりしてたのに、初めて自分が全力のバトルをする理由が定まったような気がした。

「じゃあさあ……ぶっ壊しちゃおうよ」

「ユウリ……? どうした? 顔が怖いぞ?」

ユウリはひどく邪悪そうな笑みを浮かべた。ホップはその顔にシンプルに恐ろしきを感じた。この女は今度は一体何を考えはじめたのだろう。

「ねえホップ、大会まで後何日くらい?」

「い、1ヶ月だぞ」

「ふうん、なら十分かな」

3ヶ月間なにもしていない身体に感覚を取り戻すには十分すぎる時間だ。すくなくともユウリの中では。

「え!? ユウリ、オマエ、トーナメント出るのか!? 嫌だからワールドエリアに引きこもってたんじゃないのかよ!」

「うん、ダメ?」

「いや、いいけど……いきなりどうしたんだよ」

ホップがいきなりのユウリの方針転換にびっくりしていると、ユウリはさも世間話でもするように言った。

「うーんちよつとね。チャンピオンが重いなら、それをぶっ壊して軽くしてあげようと思つて」

「は?」

「もちろんホップにも協力してもらおうよ? いや、ホップにとつては協力つてか嬉しいことかもしれないけど」

ユウリはにつこりとホップに笑いかけた。チャンピオンをぶつ壊す。何を言っているのだこの女は。ホップはユウリのもくろみがかくわからず考えることを放棄した。

「エースバーン!」

ユウリはホップの内心の突っ込みを尻目に、空気を読んで遠くでゴリランダーと遊んでいたエースバーンを呼ぶ。

「片付けよつか。キャンプはおしまい。これからまた忙しくなっちゃうけど、付き合ってくれる?」

行き先はヨロイ島。ユウリは決めた。この機会にカブさんの言う外の世界とやらを知ってみよう。

エースバーンはニツと笑つて頷いた。

それを見てユウリはほっとした気分になる。エースバーンはいつもユウリの選択を尊重してくれる。バトルを全くしなくなっても、特に気にする風もなくそばにいてくれた。

実際はもっと思うこともあるのかもしれないけど。とユウリは思う。ごめんね、こん

な行き当たりばったりのトレーナーにあなたはもつたいないかもしれない。

「あ、そういえばオレはユウリのカレー食べてないぞ。みんな美味いって評判だったのに」

「ホップはわたしの勝負の相手であって、お客さんじゃないので作ってあげませーん」

「えー!? ひどいんだぞ……」

「べーっだ」

うるさい。少しくらい意地悪させろ。ユウリはホップに向けてあつかんべーをした。

【30日後】

その日、スタジアムは熱狂に包まれていた。

満を持して開催されたガラル・チャンピオンシップトーナメント。シユートスタジアムにてその決勝戦が始まろうとしていた。

『——さあ今回48名が参加したガラル・チャンピオンシップトーナメントもいよいよ大詰め! 決勝戦! 勝ち進んだのはもちろん我らがガラル最強のチャンピオン、

ホップ!!!」

ホップが声援を背にチャンピオンマントを纏いフィールドに入場する。その表情は貫禄が漂い、どこか前チャンピオン・ダンデを想起させるものだった。

『そして対するは——準決勝でなんと前チャンピオン・ダンデを打ち破り、スタジアムを熱狂の渦にたたき込み……チャンピオンの指名通り決勝まで駒を進めた、ガラル中で話題になったこのトレーナー!』

『ハロンタウンのユウリだ——!!!』

実況が叫ぶ。観客がひととき熱狂する。その中でユウリは白いユニフォームを纏ってスタジアムに入場した。

特に観客の声援も気にすることなく、ユウリはスタジアムに進み出る。

そしてフィールドを挟んで、ユウリとホップは向かい合った。

ホップが聞こえるよう、大声でユウリに叫んだ。

「髪型、変えたんだな——!」

「うん——!」

ユウリは髪型を変えた。いつもの内向きのボブカットではなく、頭の上でお団子にしている。トレードマークの緑色の帽子も被っていない。

ヨロイ島で修行していたときに髪が揺れて邪魔だったので変えたものだったけれど、

思ったより気に入ったので今でもそのままにしている。

ユウリの様子を見ながらホップはユウリが自分に語った『計画』の内容を思い出していた。それを実現するならユウリは最強のトレーナーにならなければいけない。もちろんこの場でオレを容赦なくぶちのめそうとするだろう。

だが、これはポケモンバトル。いかにユウリの『計画』がホップのために行うものであろうが、ホップ自身に手を抜くつもりなど毛頭ない。むしろユウリの全力を受け止められることで胸がわくわくしていた。

『チャンピオン、挑戦者。ともにポケモンを!』

審判が声高々に宣言した。ユウリとホップはそれぞれ最初のモンスターボールを手にとった。

『ガラル・チャンピオンシップトーナメント! 決勝戦! バトルスタート!』

瞬間、地鳴りのような歓声。ビリビリと鼓膜が振動する。それにかまわずホップとユウリは同時にボールを投げた。

「頼むぞ相棒!」

「いくよ、エースバーン!」

1体目、ホップはバイウールー。ユウリはエースバーン。

『おつとオ!!?』なんとユウリ選手、まさかの1体目からエースを投入!!! これの意味す

るものとは!! これはチャンピオンに対する6タテ宣言!! 圧倒的に不遜な挑戦状だ

!!!

観客もざわめいている。あまりに不遜な挑戦者。その展開はいつしか正義のチャンピオンと悪役のチャレンジャーの図式を生み出す。

3対3ならともかく、ある程度興業としてのセオリーが決まっているガラルリーグにおいて、フルバトルでエースを最初に出すのは禁じ手である。それは「お前をこれから6タテするから覚悟しろ」というメツセージだ。

異様な雰囲気に含まれるスタジアム。それを気にする素振りもなく、ユウリはモンスタールを目の前に突き出した。

エースバーンが、再びボールに戻っていく。

瞬間、スタジアムの時が、止まる。

しん、と誰しもが言葉を失い、すべてが静寂に含まれる。

そんな中、ユウリの声だけが不自然なほどスタジアム中に響いた。

「——エースバーン、行くよ。キョダイマックス!!!」

ユウリが勢いよく背後に大きくなったモンスタールボールをぶん投げた。

ズシン、と地響きを伴ってキョダイエースバーンが現れる。  
演出、ではない。

戦術としてユウリはそれをした。

ダイマックスというのは基本的に後出しした方が有利だ。

そうでなくとも同時に使うのがセオリー。当然だ。先手でダイマックスを使い切れれば後半戦で圧倒的に不利な盤面になる。手札を使い切った状態では相手のペースに必然的に飲まれてしまう。それはエリートトレーナーならば考える当たり前の流れだ。

本来決して初手で使つていいものではない。

しかもここはトーナメント決勝戦。最強のトレーナー同士がぶつかる場所。

意図が、見えない。

実況も言葉を忘れて息を呑んでその姿を見守っている。

「——ユウリ、お前つてヤツは……!」

ホップは表情を強ばらせた。この手は流星に想像していなかった。

汗が頬を伝う。力強く立つユウリの向こう側で、エースバーンの乗るキョダイカキユウの焦がすような熱さはホップの元までじりじりと届いていた。



この作戦はなんだ？　どんな戦術で来る？　見たことがない。わからない。唾然としたホップは混乱から張り詰めた意識がほんの少しだけ緩まるのを感じた。それを見たユウリが陽炎の奥でゆらりと笑う。わずかに口が動いた気がした。

かかってこいよ。怖いのか？

「……ッ！」

「来い!!!　ホップ!!!」

ユウリは叫んだ。

さあチャンピオン、やれるものならこのわたしをぶちのめしてみせろ！　その座を守りきって見せろ！



「まるで、映画みたい」

「何言ってるんですかあなたは」

マリイが関係者用の観客席でぽつりと呟くと、ビートは呆れるようにそう返した。

「だつてさ……こんなのまるで、正義のチャンピオンと悪役のチャレンジャーみたいじゃん。ユウリがどういうつもりかわからんけど……」

「ふん、そんなことはどうでもいいですよ。しかし……イライラしますね。ユウリには「え？」」

ビートはキョダイエースバーンを見やりながら不快そうに歯噛みした。ユウリはあの姿のエースバーンは今まで使っていなかったはずだ。3ヶ月のブランクがあるくせに新しい力を身に付けて帰ってきた。

「たった1ヶ月でまるで別人のように鍛え上げてきた。その才能、嫉妬せずにはいられませんか。まあ、だからこそ……とっておきの勝負が楽しみにはなるんですがね」

言い捨てるようにして、ビートは席を立ち上がる。それを見てマリイは驚愕の声を上げた。

「え、ビート！ 見て行かんの!？」

「僕としてはユウリのあの姿を見たら満足なのでね。現時点でホップが勝とうがユウリが勝とうがどうでもいい。それにバアさんが紅茶を淹れるだのお菓子を作れたの、注文が忙しいんですよ。なのでこれで失礼します」

（——それにこのバトルを見たらきつと、とっておいた勝負の楽しみが減ってしま  
うでしようからね）

先にユウリの手の内など知らなくともよい。唾然としたマリイを尻目に、ビートは近い未来に訪れるその時を楽しみにフィールドから目線を外す。そして出口に向かう途中、ぴたりと足を止めてマリイに向き直った。

「マリイ、1つ忠告です。あなたも僕も、そしてこのポケモンリーグに参加する全てのトレーナー……いや、このガラル地方全てが、ですか。その映画とやらにこれから否応なく巻き込まれますよ。自分だけ観客になった気分であれば、そのうち痛い目を見るでしょうね」

「痛い目って、どういうことよ……」

「嵐が来ますよ。メジャーリーグのジムリーダーのままでもいいのであれば、乗り遅れないことです。あなたも。もちろん僕もね」

きつと時代はさらに変わる。チャンピオンもきつと一強などではなくなる。

これから忙しくなりそうだ。ビートはワクワクした気持ちでスタジアムを後にした。今のユウリを見たら、さぞバアさんはピンクだ。ピンクだと興奮することだろう。



「フ、ユウリさん。あなたの描く新たな戦術、拝見しますよ」

マリイとビートが居た観客席とは別の場所、そこでマクワは口角をつり上げて興奮を抑えきれぬ笑みを浮かべた。

これから何が起きるのか楽しみで仕方ない。もつとあなたの常識に囚われない新たな戦術、戦略を見せてほしい。それでこそ僕も強くなれるのだから。

「カブさん、彼女を焚き付けたのはあなたでしよう？」

マクワは隣に座っていたカブに声をかけた。2人は世代の差もあつて今まではそれほど交流のあるジムリーダーではなかったが、つい1ヶ月前にユウリの件について話す機会があつたのでそれからよく話すようになっていた。お互いストイックな部分もあつて、意外にもこの2人は良き友になつていた。

「いや、ぼくはただほんの少しお節介をただけさ。本当にユウリくんを動かしたのは、きつと彼だろう」

カブはちらりとホップの姿を見、そしてユウリとエースバーンの方に視線を戻した。

ぼくの予想は間違つていなかった。ユウリくん、きみはやはりジムリーダーという立場では収まらない。きみは時代を変える女だ。

「ユウリくん！ きみはねつぷうのようにこのガラル地方全てを巻き込み熱くする燃え

さかる炎だ！ 新しい時代をぼくたちに見せてくれ！」

カブは胸の内にこみ上げる興奮に従い、大声で叫んだ。それがユウリに届いたかは分からない。

ラスボスとして死に、観客に戻った少女は今、自分の物語の主役として蘇る。

先に動いたのは、ユウリだった。

お腹に力を入れて、力強く叫ぶ。これがわたしとホップの夢を探す勝負の始まり。手始めにその邪魔な重すぎる玉座をぶっ壊してやる。

「エースバーン、キョダイカキユウ!!!」

巨大な火の玉が目も眩む太陽のような輝きを放った。



その後、チャンピオンの座は1〜2年ごとに入れ替わる流動的なものになった。

ユウリが招いた新たな時代は、ガラル地方の人々に熱狂をもって迎えられる。

誰しもがチャンピオンを目指せる。

そのモチベーションからメジャーリーグとマイナーリーグの入れ替えも激しさを増し、ジムチャレンジのエントリー数も右肩上がりになった。この時代のガラルリーグは後に戦国時代と呼ばれるほどレベルの高いものとなっていく。

その後ユウリは負けることも多々あったが、幾度となくチャンピオンの座を奪った。そしてその度にチャンピオンの業務を放棄し、自由に旅をする自分勝手なチャンピオンとして運営委員会を大いに困らせることになった。ただそんな暴挙も、ユウリに付いた不遜で悪役なトレーナーというイメージから、ある意味ガラル地方の人々からは受け入れられた。

それに加えてチャンピオンの座が流動的になったこともあり、今までチャンピオン1人に集約されていたリーグの業務は徐々に各ジムリーダーたちに分散され、チャンピオンという座はガラル地方最強のトレーナーの象徴としてだけの存在に変化していく。

ガラル地方のチャンピオンという鎖で縛られた重い玉座は、いつの間にかとても軽いものになっていったのだ。

こうして数年後、ユウリの『チャンピオンの玉座をぶっ壊す計画』は完遂された。

1つユウリにとって予想外だったのは、悪役なイメージが付いた自分にも一定のファ

ンが付いたということだった。ヒール役が好きな奇特なファン層からユウリというトレーナーは末永く愛されたという。

ホップも時にはチャンピオンになることもあったが、ユウリとの勝負に従い新しい夢を探していくことになる。そして、やがてソニアからの誘いを受け、研究者とポケモントレーナーの二足の草鞋を履くことになる。

「ポケモンのことを深く知ったらもつと強くなれるかもよ？」というのがソニアの誘い文句だった。やがて一角の研究者となったホップはその培った知識によって、さらにバトルの戦略のキレが増しガラルリーグ最強のトレーナーの一人として歴史に名を残していくことになる。

ビートとマリイも、いつしかジムチャレンジ7番目と8番目のジムリーダーの座を奪い合いながら、ガラル地方のトレーナーの強大な壁として君臨し、幾度となく名勝負を演じた。戦国時代の中で時には2人がチャンピオンとして頂点に立つこともあった。

時代は、変わった。

## 【X日目】

チャンピオンシップトーナメントから少し経ち、ユウリは再び旅を始めていた。ここはガラル地方ではない、遠い地方のどこかである。

そして、そんなある日。

「ね、エースバーン。昨日ソニアさんから連絡あったんだけどさ、カンムリ雪原っていうところに調査員として来ないかって。ホップも行くつてさ。ここにはまだわたしたちが見たことないポケモンがいるみたいだよ！」

ユウリはエースバーンにスマホに写った雪景色の映像を見せながら、ワクワクした顔でにししと笑う。

結局、わたしにはまだ夢はない。でも、今がとても楽しいのは本当だ。旅をしている中で、いつかわたしもキラキラした宝石のような何かを見つけられるだろうか？

きつと夢を探すわたしたちの映画は、まだまだ終わらないのだろう。不思議だけれど、夢を探しながら旅してる今が一番ワクワクしてる。

「行くっか。エースバーン！」

エースバーンは瞳を煌めかせて力強く頷く。



ユウリはニツと笑みを返した。そして2人はまた新しい冒険に駆けだしていく。

— F i n —